慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古今和歌序 影印と翻刻
Sub Title	A photocopy and transcription of Kokin wakajo
Author	山田, 尚子(Yamada, Naoko) 堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2022
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.56 (2021.) ,p.55- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20210000-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古今和歌序　影印と翻刻

山田尚子
堀川貴司

本書は、早くから斯道文庫に収蔵されていたが、全貌の紹介がなされないままであった。『本朝文粋』所収作品以外は古い訓読の様相を容易に知ることができない和歌序（歌集序・歌会序）等についての貴重な資料であるので、訪問准教授として一年間斯道文庫にて研究に従事する山田氏を誘って、共同研究という形で翻刻および訓読を試みた。訓読については、通読の便を考え、訓点語研究における厳密な方法を採らず、凡例に示したような形で行った。大方のご批正を賜らば幸いである。

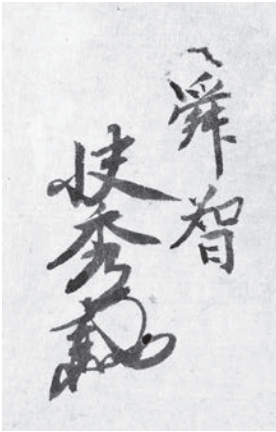
なお、凡例および作品1～3の翻刻・訓読は山田、その他の部分は堀川が礎稿を担当し、読み合わせによって訂正増補を加え成稿した。（堀川）

【書誌解題】

古今和歌序（外題）〔室町前期〕写　中本（四半本）一冊

原装本文共紙表紙（二〇・六×一五・五糎）（図版一）、列帖装（五折、一折四枚八丁×四折と一・五枚三丁一折、本文末一丁は一枚二丁の折り目部分に貼付）、料紙楮打紙、薄茶色を呈している。外題中央打付墨書（本文同筆）「古今和歌序」。前遊紙一丁あり。本文墨付三二丁（墨付末尾三十二オ）。ほぼ一筆で書写されているが、十一ウ二行目、二十九オ四行目「嘉辰」から同ウ四行目までの二カ所は別筆か。

本文無辺無界七行一二字乃至一四字、字高一六・九糎（四オ一行目）。句ごとに改行や分かち書きを行って対句構成を視覚



図版二

図版一

化した書写形式。朱ヲコト点・レ点・竪点・声点、墨返点（二十六ウ「匪」の四点は点四つで表記する）・声点・送仮名・読仮名・合点を施す。ヲコト点は、古紀伝点と見られ、星点のテ（返点兼用も）・ニ・ヲ・コト・ト・ハ・ム・ノ・ス・句点・切点、鉤点のナリ・ヨリ・タリ・タル・モ、人名を示す線点が認められる。声点の濁音表示は、圏点二つのものと横線＋圏点とを混用する。仮名はキ（縦画のみ）・サ（七に似た形）・ス（爪）・セ（才に似た形）・ホ（口＋一）・マ（一＋ノ）・ミ（見の草体の最終画を省く形）・ワ（禾）などの古体が見られるほか、云（いふ）・如（ごとし）も用いる。なお、二十四オ「捜」の「サグル」、二十六ウ「礪」の「トグ」の「グ」は濁点がカナの左下に付されている。

現状で第二十五丁と第二十八丁とが入れ違っている。この二丁は一枚の料紙であるので、綴じ直しの際に逆に折って重ねてしまったためであろう。また、最後の作品の冒頭から大部分が欠けているのは、最後の折に何らかの故障があり、現状で第三十一丁のもう半分（一丁分）、もしくはそれに加えて一枚分（二丁）程度が失われたためであろう。『本朝文粋』の配列では、「春日野遊」と「初冬泛大井河……」の間に「暮秋泛大井河各言所

懐和歌序」があり、もしこれも収めていたとすると後者の可能性が高い。

前遊紙オモテに「〈舜智〉／快秀（花押）」という所持者（あるいは本文同筆とも見られるので、書写者の可能性もあるか）らしき識語（図版二）、裏表紙左端に「スミツキ［　］三十二丁」とのメモがそれぞれ墨書される。このメモは現状の丁数と一致しており、先に述べた故障（落丁）後に書かれたものである。

また、冊末に「月明荘」、帙内側に「弘文荘」印記あり。ただし待賈古書目には掲載されておらず、目録を通さずに購入したものと思われる。斯道文庫の『創立十周年記念近蒐善本展観書目録』（一九七〇年）に、「115　古今和歌序　〔室町〕写」として掲載、解説が載り、その後『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選』（汲古書院、一九九七）に「51古今和歌〔真名〕序等　〔室町前期〕写」として図版・解説を収める。

作品は順に1「古今和歌序」（一オ～）2「新古今和歌集序」（十オ～）3「續古今和歌集序」（十九オ～二十四ウ、二十八オウ、二十六オウ、二十七オ）4「柿下朝臣人麿畫讃一首幷序」（二十七オウ、二十五オウ、二十九オ）5「一條院御時中宮御産百日和哥序」（二十九オ～）6「春日野遊詩序」（三十ウ～）7「（初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序）」（三十二オ）となっている。勅撰和歌集の真名序三篇、畫讃一篇、和歌序三篇で、1・5・6・7は『本朝文粋』に収める。5・6・7については本文がほぼ同一であることから、同書から抜き出した可能性が高いが、1はかなり異同があるので、他の来源を考える必要があろう。1・2・3ともに、それぞれの集からの採取であろうか。また、4は『本朝続文粋』『和歌真字序』等に収めるものだが、本文は『和歌真字序』との一致度が高い。

編者は不明とせざるを得ないが、使用された訓点から見て、紀伝道の儒者が関与している可能性が高いであろう。成立は、所収作品中最も成立の遅い『続古今和歌集』真名序の文永二年（一二六五）を上限とし、推定される書写年代の室町前期までのどこか、となるが、もし勅撰和歌集の真名序をすべて収める意思が編者にあったとすれば、続古今に続く『風雅和歌集』の真名序が収められていないことから、その執筆年の貞和二年（一三四六）が下限となろう。

先に触れた斯道文庫の展観書目録解説に、「この種の訓点本は、神宮文庫に「古今集真名序訓点」（一冊）、龍門文庫に「古今新古今漢序訓点」（江戸初写・二巻一冊）などあるほか、他に伝

存本が識られない」とある。

前者（三・500）は国文学研究資料館紙焼写真（C5831）によって一覧したところでは、江戸前期頃写本大本一冊（村井古巌奉納本）、書名は外題、内容は古今集真名序のみで、返り点送り仮名と総ルビを施したものである。翻刻の行数でいうと65「大夫」を「丈夫」、110「歌」のあとに「日續万葉集」の五字があるなど、定家本など鎌倉期以降の流布本文に拠っていることがわかる。また、15「興」に「ケウ」（本書は「クヰヨウ」）、30「漸」に「ヤウヤク」（本書は訓はないが「ニ」のヲコト点を付す）という振り仮名を記すなど、本書よりは時代が下る訓読を反映していると思われる。

後者は未見、川瀬一馬『龍門文庫善本書目』（阪本龍門文庫、一九八二）第七・田村右京大夫宗永遺書の部、七五四番に著録され、逍遙院（三条西実隆）の自筆加点本を写した旨の慶長八年（一六〇三）本奥書が両序末に付されていることなどが記されている。

他に類似の書名を持つものとして、『勅撰集漢序集』（陽明文庫）『諸集漢序』（四天王寺国際佛教大学恩頼堂文庫）もあるが、いずれも未見、付訓本かどうかも不明。

これらとの比較検討も課題であるが、今回はとりあえず斯道文庫本の紹介を目的とし、出典の可能性がある書物の所収本文との異同を示すのみにとどめた。

【翻刻凡例】

・底本の配字・用字はできるだけ忠実に再現する。ただし同行内の分かち書きについては、句と句の間を一字あきに統一する。訓点は省略し、訓読に反映させるのみとする。

・作品ごとに毎行通し番号を付す。

・本文が誤写と思われ、対校本で校訂できる場合は、校異欄にその旨を記し、訓読は校訂後の本文によって行う。

・訓点が誤写と思われるものは、校異欄に※を付して注記し、訓読は訂正後の形で示す。

・仮名で後筆と見られるものはその旨を注記し、訓読には反映させない。

・各作品について、出典の可能性がある書物の最善本あるいは最古写本を選んで校異を掲出する。対校本文は以下の通り（特に注記しない限り影印本またはデジタル画像による）。

1「古今和歌序」…筋切『古今和歌集』（筋）・身延山久遠寺蔵『本朝文粋』（粋）

・筋切は、明らかな補入注記の文字は本文に組み込み、補入かミセケチか明確でないものはそのまま掲出した。

・『本朝文粋』は、底本の「歌」および「哥」の字をすべて「謌」に作るが、その異同は掲出しない。（5、7も同様）

2「新古今和歌集序」…国立歴史民俗博物館蔵『新古今和歌集』（伝冷泉為相筆）

3「續古今和歌集序」…尊経閣文庫蔵『続古今和歌集』（原本未見、和歌文学大系『続古今和歌集』（明治書院、二〇一九）の翻刻による）

4「柿下朝臣人麿畫讃一首幷序」…国立公文書館蔵金沢文庫本『本朝続文粋』（続）、保阪潤治蔵『和歌真字序』（東京大学史料編纂所影写本による）（真）

5「一條院御時中宮御産百日和哥序」…身延山久遠寺蔵『本朝文粋』

6「春日野遊詩序」…身延山久遠寺蔵『本朝文粋』

7「（初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序）」…身延山久遠寺蔵『本朝文粋』

【訓読凡例】

・繰り返し記号が語頭に来るなど、もとの字に戻して表記した方がよいと判断される場合はそのようにする。

・ヲコト点・カナ点の区別をせず、すべて平仮名で表記する。活用語尾等、訓読者の判断で補った仮名はパーレンで囲む。なお、振仮名部分は原則として補わず訓点のままとするが、声点等によって読みが特定できる場合などは例外的に補う。

・作品内の改行は「」で示して追い込みにする。

・面がわりの箇所は「（一オ）」のごとく表記する。

・助詞・助動詞等の扱いについては以下の通りとする。

・置き字（「於」「于」「者」など）は残さない。

・「之」を読まない場合は残さない。

・「なり」の意の「也」→なり

・「の」「が」の意の「之」→の・が

・「ず」の意の「不」「未」→ず

・「べし」の意の「可」→べし

・「て」の意の「而」→て

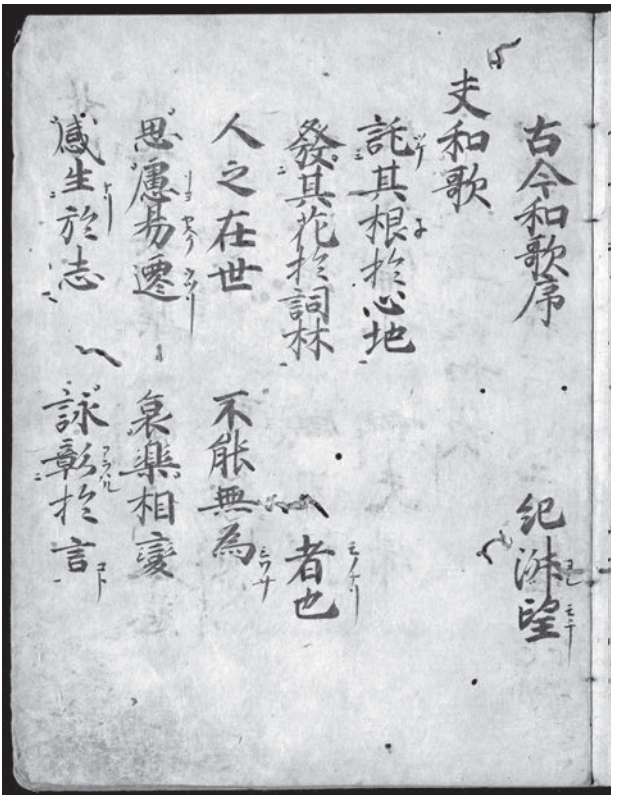
・「は」の意の「者」→は

・「らる」の意の「被」→らる

・「しむ」の意の「令」「俾」→しむ

・「かな」の意の「哉」→かな

・「…とす」の意の「為」→為(す)
・「たり」の意の「為」→為り
・「…むとす」の意の「欲」→欲(す)
・振仮名に漢字が出てくる場合は、平仮名に開いて表記する。
・複数の訓読が示されている場合は、合点の有無に関わらず、右傍の仮名注記およびヲコト点を優先し、他の訓読はその後に【　】で示す。
・清濁については、音読みの場合は声点に従い、訓読みの場合は訓読者の判断で適宜分かつ。

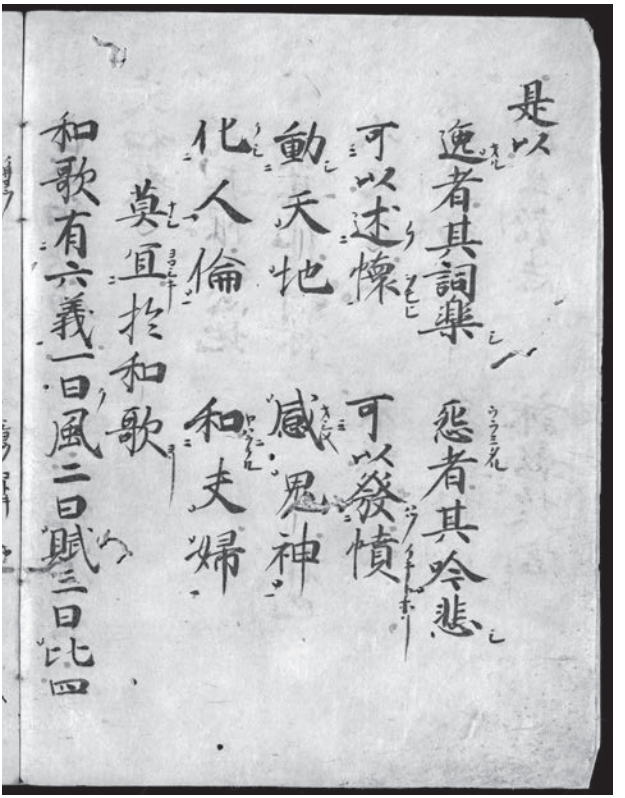


（一オ）

作品1　古今和歌序

1　古今和歌序　紀淑望
2　夫和歌
3　託其根於心地
4　發其花於詞林　者也
5　人之在世　不能無為
6　思慮易遷　哀樂相變
7　感生於志　詠彰於言

1　歌―歌集（筋）、紀淑望―ナシ（筋）
2　歌―歌者（筋・粋）
4　花―華（筋）
7　彰―形（筋・粋）



（一ウ）

8 是以

9 逸者其詞樂　怨者其吟悲

10 可以述懷　可以發憤

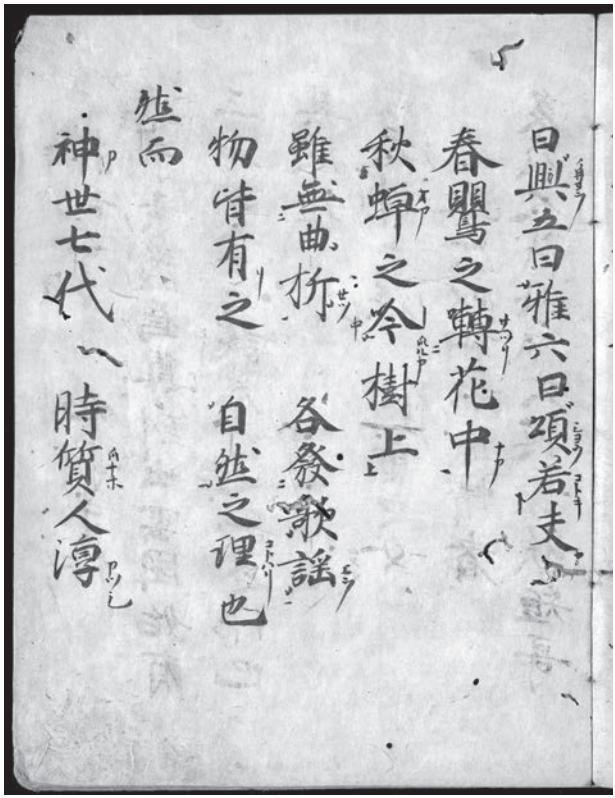
11 動天地　感鬼神

12 化人倫　和夫婦

13 莫宜於和歌

14 和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四

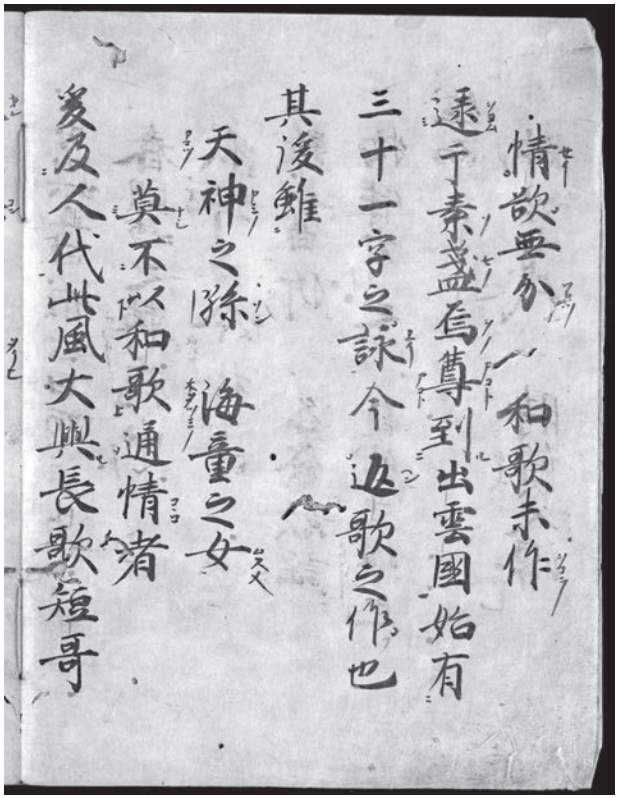
14 比四—□□（粋）



（二オ）

15　曰興五曰雅六曰頌若夫
16　春鶯之轉花中
17　秋蟬之吟樹上
18　雖無曲折　各發歌謡
19　物皆有之　自然之理也
20　然而
21　神世七代　時質人淳

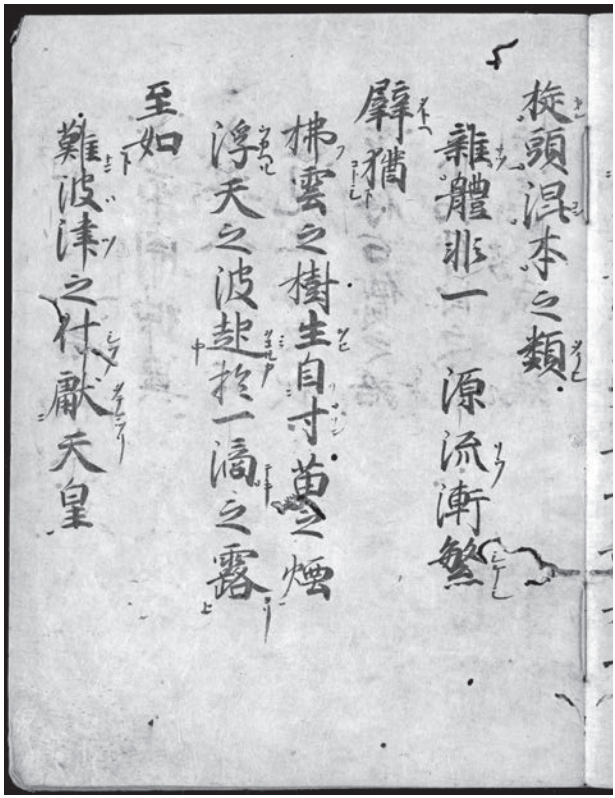
17吟—鳴吟（筋）



（二ウ）

22　情欲無分　和歌未作
23　逮于素盞烏尊到出雲國始有
24　三十一字之詠今返歌之作也
25　其後雖
26　天神之孫　海童之女
27　莫不以和歌通情者
28　爰及人代此風大興長歌短哥

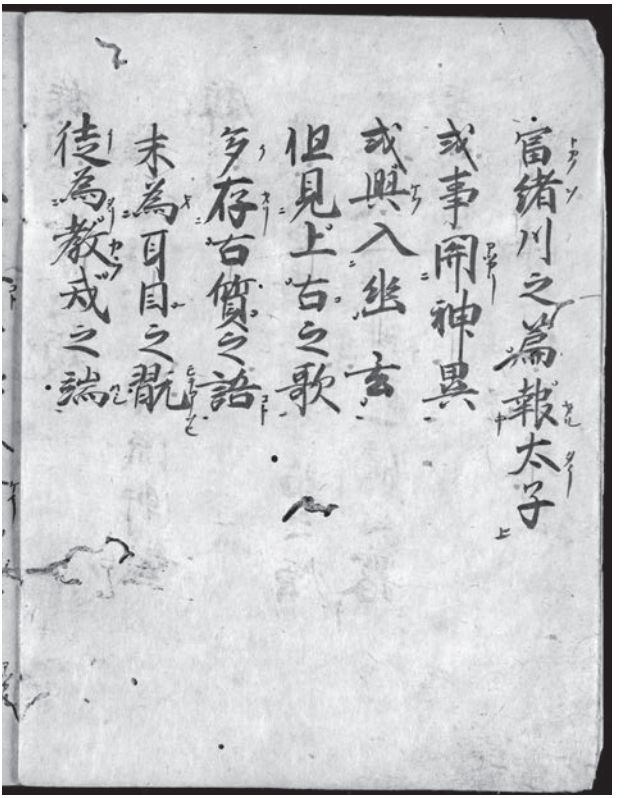
22歌―哥（筋）
23盞烏―戔嗚（筋）、始―初（筋）
24三十―卅（粋）、返―反（粋）
26孫―絲（筋）　※「女」のヲコト点「ヲ」は「ト」の誤りと見る。
27莫―専莫（粋）、情―ナシ（粋）、者―者也（筋・粋）　※訓読では「者」を不読。



（三オ）

29 旋頭混本之類
30 雜體非一　源流漸繁
31 譬猶
32 拂雲之樹生自寸苗之煙
33 浮天之波起於一滴之露
34 至如
35 難波津之什獻天皇

29 旋―換（筋）
32 ※「自」にある「リ」と「寸」にある「ソン」は後筆。

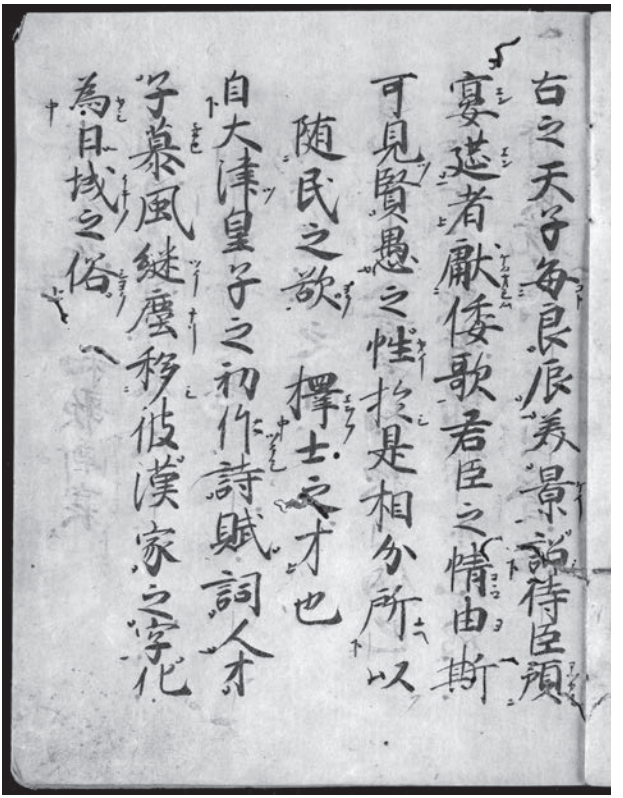


（三ウ）

36 富緒川之篇報太子
37 或事關神異
38 或興入幽玄
39 但見上古之歌
40 多存古質之語
41 未為耳目之翫
42 徒為教戒之端

36 川—河（粋）
39 歌—哥（筋）
40 質—質賢（筋）
42 戒—□（粋）

※「教」の振り仮名「カウ」は後筆か。

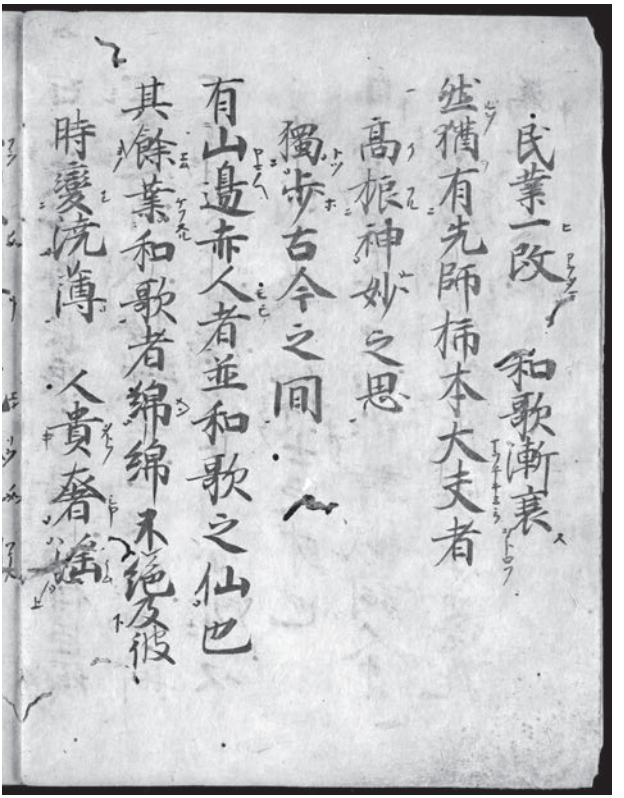


古之天子每良辰美景詔侍臣預
宴筵者獻倭歌君臣之情由斯
可見賢愚之性於是相分所以
隨民之欲　擇士之才也
自大津皇子之初作詩賦詞人才
子慕風継塵移彼漢家之字化
為日域之俗

（四オ）

43古之天子每良辰美景詔侍臣預
44宴筵者獻倭歌君臣之情由斯
45可見賢愚之性於是相分所以
46　隨民之欲　擇士之才也
47自大津皇子之初作詩賦詞人才
48子慕風継塵移彼漢家之字化
49為日域之俗

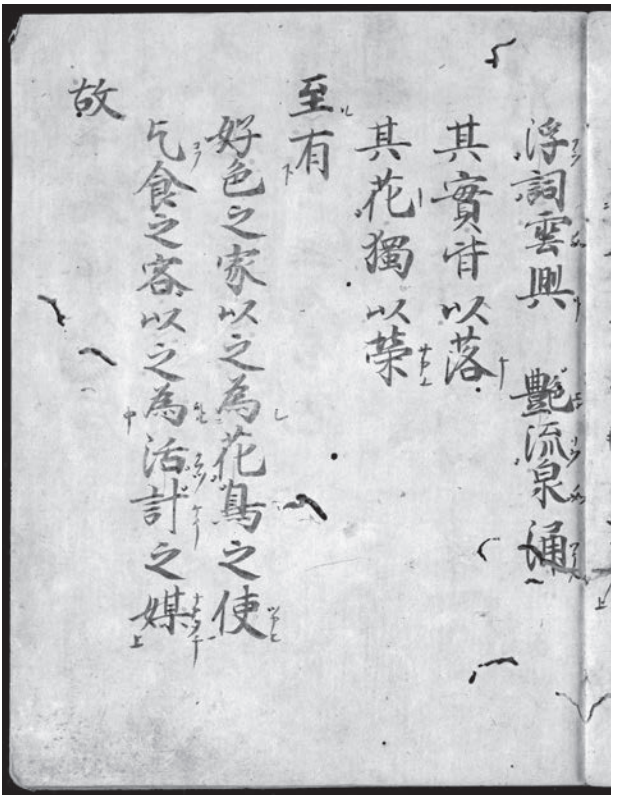
43之―ナシ（筋・粋）、毎―斯毎（筋）、臣―宴（筋）
44宴―ナシ（筋）、倭―和（筋・粋）、斯―是（筋）
46隨―隨之（筋）、欲―欲歟（筋）
48字―字宗（筋）、化―為（粋）
49為―我（筋・粋）、日域之―日本国域之之（筋）



（四ウ）

50　民業一改　和歌漸衰
51　然猶有先師柿本大夫者
52　高振神妙之思
53　獨歩古今之間
54　有山邊赤人者並和歌之仙也
55　其餘業和歌者綿綿不絶及彼
56　時變澆薄　人貴奢淫

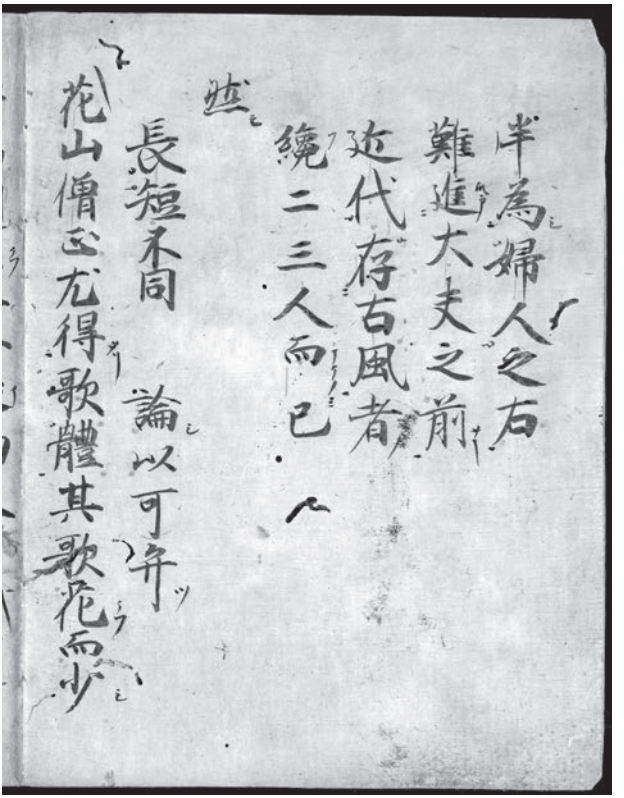
50　和歌―倭哥（筋）
51　本―下（粋）
※「猶」にある「ヲ」の送り仮名は後筆。
54　並―幷（筋）、歌之―哥（筋）
55　和―倭（筋）
56　澆―繞（澆）（筋）、薄―醨（筋）・漓（粋）



（五オ）

57　浮詞雲興　艶流泉涌
58　其實皆以落
59　其花獨以榮
60　至有
61　好色之家以之為花鳥之使
62　乞食之客以之為活計之媒
63　故

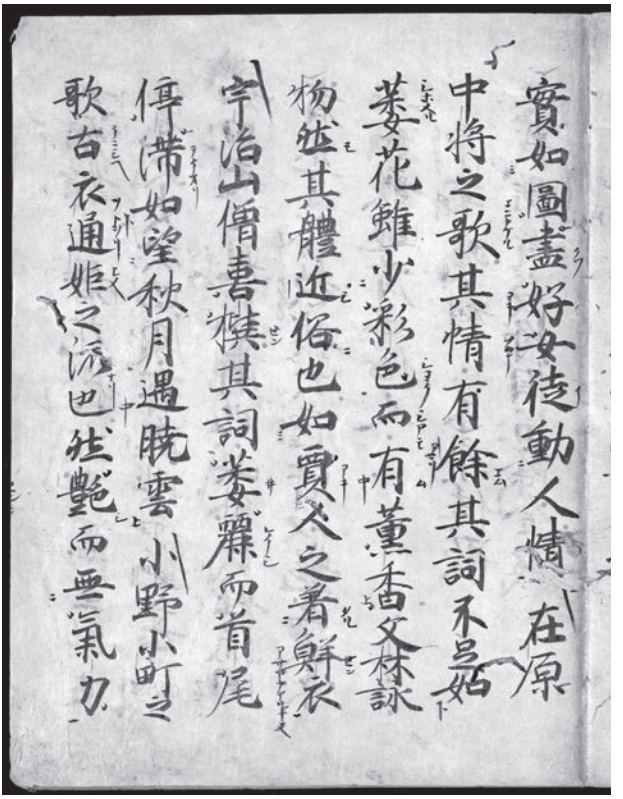
58　以―ナシ（筋・粋）
59　花―華（筋）、以―ナシ（筋・粋）
61　之―此（筋・粋）
62　之―此（筋）
※「食」のヲコト点「ト」は「ヲ」の誤りと見る。



（五ウ）

64　半為婦人之右
65　難進大夫之前
66　近代存古風者
67　纔二三人而已
68　然
69　長短不同　論以可弁
70　花山僧正尤得歌體其歌花而少

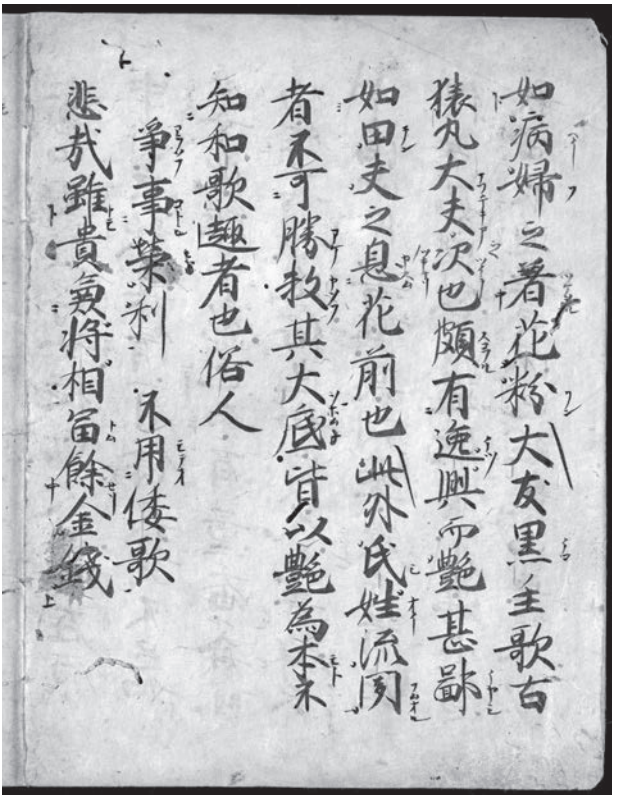
67　而已—ナシ（筋）
69　弁—辨（筋・粋）
70　花—華（筋）、歌—哥（筋）、其歌花—其甚華（筋）・然其詞甚花（粋）
　　（然哥其躰）
※「花」にある「ク」は後筆か。


實如圖畫好女徒動人情　在原
中将之歌其情有餘其詞不足如
萎花雖少彩色而有薫香文林詠
物然其體近俗也如賈人之著鮮衣
宇治山僧喜撰其詞萎麗而首尾
停滞如望秋月遇暁雲　小野小町之
歌古衣通姫之流也然艶而無氣力

71實如圖畫／好女徒動人情／在原
72中将之歌其情有餘其詞不足如
73萎花雖少彩色而有薫香文林詠
74物然其體近俗也如賈人之著鮮衣
75／宇治山僧喜撰其詞萎麗而首尾
76停滞如望秋月遇暁雲／小野小町之
77歌古衣通姫之流也然艶而無氣力

71圖畫—畫圖（粋）
72歌—哥（筋）
73林—琳巧（筋・粋）
74也—ナシ（筋）
75喜撰—撰喜（筋）、其詞萎—詞甚美（筋）・其詞華（粋）
76※「望」のヲコト点「カ」は「ニ」の誤りと見る。
77然艶而—然而其艶（筋）

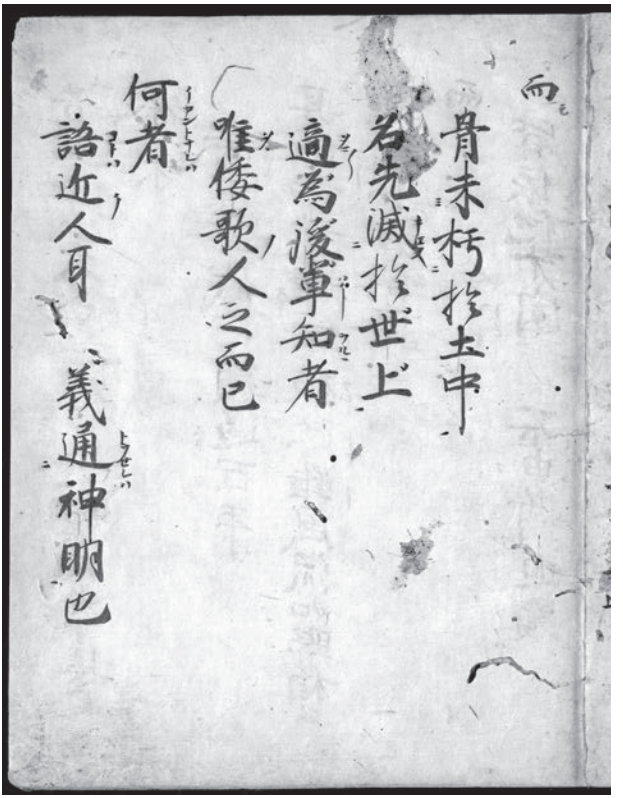
（六オ）



（六ウ）

78 如病婦之著花粉／大友黒主歌古
79 猿丸大夫之次也頗有逸興而艶甚鄙
80 如田夫之息花前也／此外氏姓流聞
81 者不可勝数其大底皆以艶為本不
82 知和歌趣者也俗人
83 争事榮利　不用倭歌
84 悲哉雖貴兼將相富餘金錢

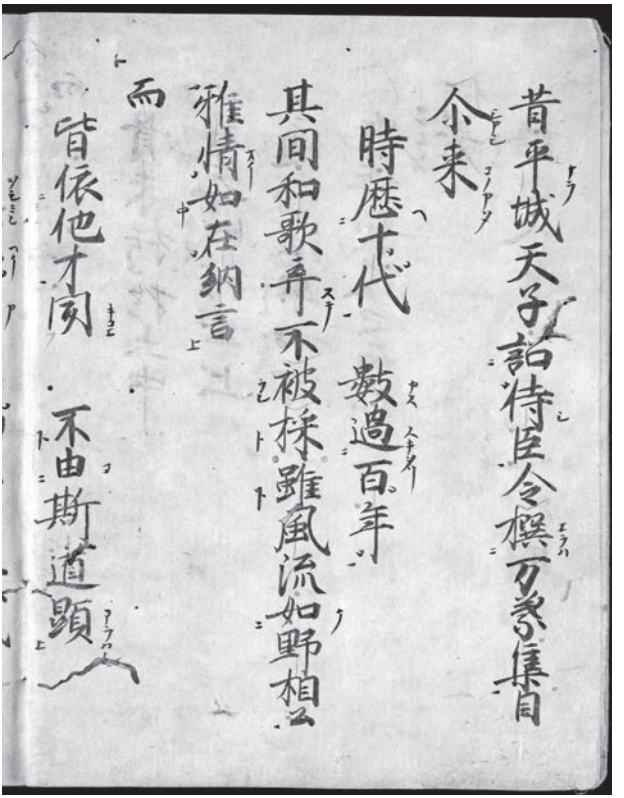
78 友—友（伴）（筋）、主歌—主其哥（之）（筋）
79 次—次（流）（筋）、艶—體（筋・粋）
80 此—其（粋）
81 本—基（筋・粋）
82 和歌—哥（筋）・謌之（粋）
83 用—聞（用）（筋）、倭—和（詠）（筋・和（粋）、歌—哥（筋）
84 兼—蕪（兼）（筋）、將相—相將（筋・粋）



（七オ）

85 而
86 骨未朽|於土中
87 名先滅於世上
88 適為後輩|知者
89 唯倭歌之人而已
90 何者
91 語近人耳　義通|神明也

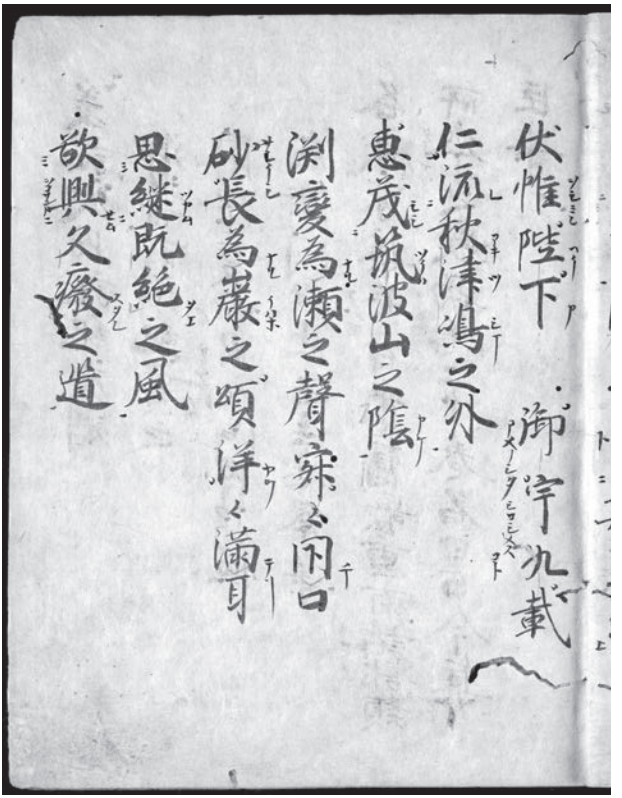
86 朽—腐（筋・粋）
88 輩—世（筋）・輩被（粋）
89 倭歌—和哥（筋）、之人（筋・粋）—人之（底）（誤写と見て校訂）
91 通—貫（筋）



（七ウ）

92 昔平城天子詔侍臣令撰万葉集自
93 尒来
94 時歴十代　數過百年
95 其間和歌弃不被採雖風流如野相公
96 雅情如在納言
97 而
98 皆依他才聞　不由斯道顕

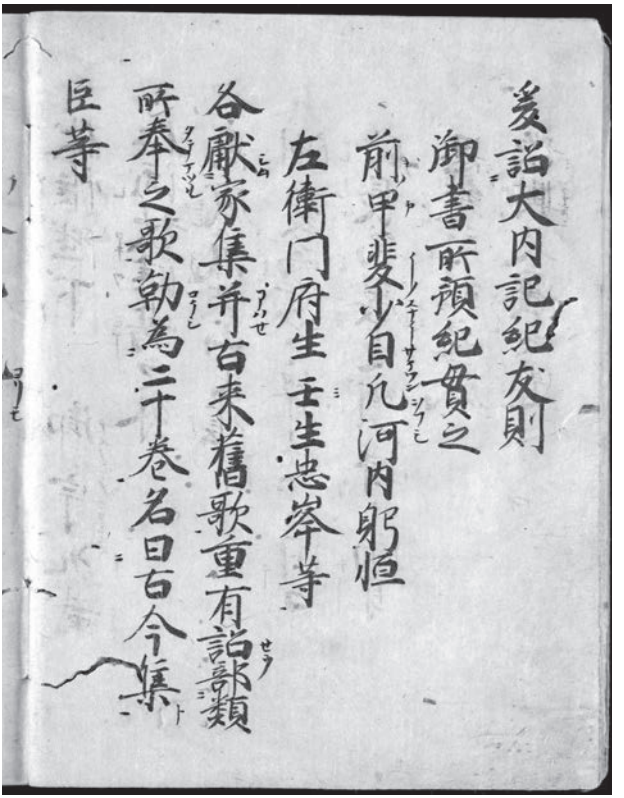
93 来—以来降（筋）・以来（粋）
94 過—遇（粋）
95 和歌—倭哥（筋）、採—探採（筋）、相公—宰相相公（筋）
96 雅—軽（筋）
98 依—依以（筋）、由—以（筋・粋）



（八オ）

99 伏惟陛下　御宇九載
100 仁流秋津嶋之外
101 恵茂筑波山之陰
102 渕變為瀬之聲寂々閉口
103 砂長為巖之頌洋々満耳
104 思継既絶之風
105 欲興久癈之道

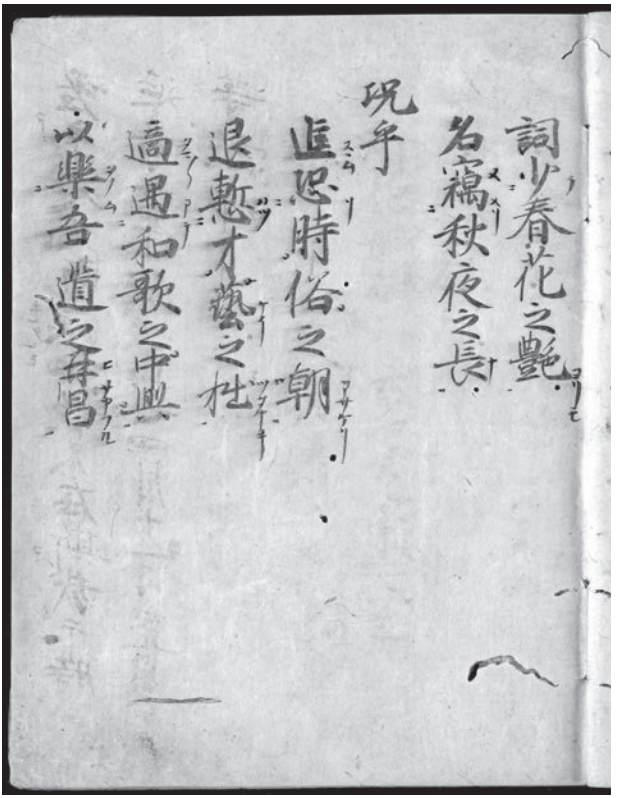
99伏惟—ナシ（筋）、宇—天下于今（筋）・宇于今（粋）
100嶋—洲（筋・粋）
103砂—沙（粋）、満—盈（筋）
105癈—廢（粋）


爰詔大内記紀友則
御書所預紀貫之
前甲斐少目凡河内躬恒
左衛門府生壬生忠峯等
各獻家集并古来舊歌重有詔部類
所奉之歌勒為二十卷名曰古今集
臣等

（八ウ）

106 爰詔大内記紀友則
107 御書所預紀貫之
108 前甲斐少目凡河内躬恒
109 左衛門府生壬生忠峯等
110 各獻家集并古来舊歌重有詔部類
111 所奉之歌勒為二十卷名曰古今集
112 臣等

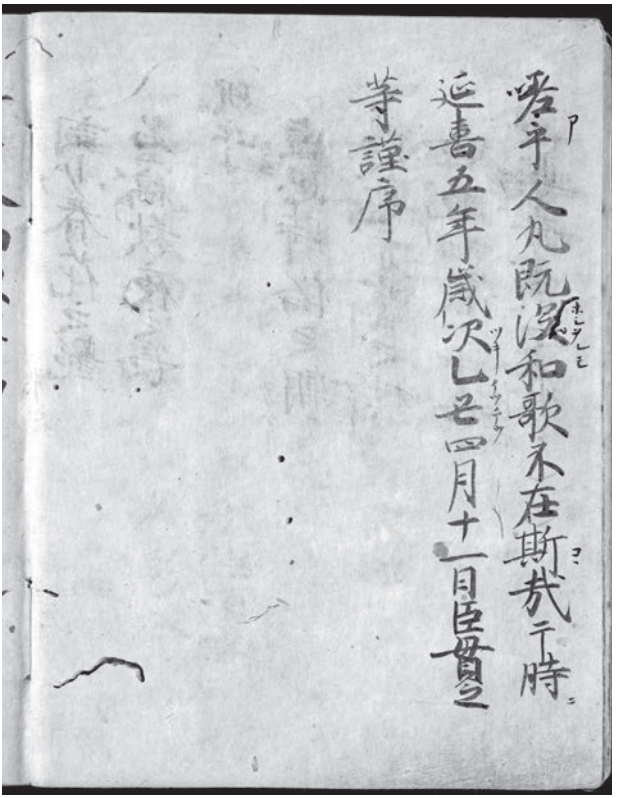
108 斐―裴（粋）
109 左―右（筋・粋）、峯―岑（筋）
110 歌―哥於是（筋・粋）
111 歌勒―哥勤（筋）、二十―廿（粋）、卷―弓（筋）、今―今和哥（筋・粋）



（九オ）

113 詞少春花之艶
114 名竊秋夜之長
115 況乎
116 進恐時俗之嘲
117 退慙才藝之拙
118 適遇和歌之中興
119 以樂吾道之再昌

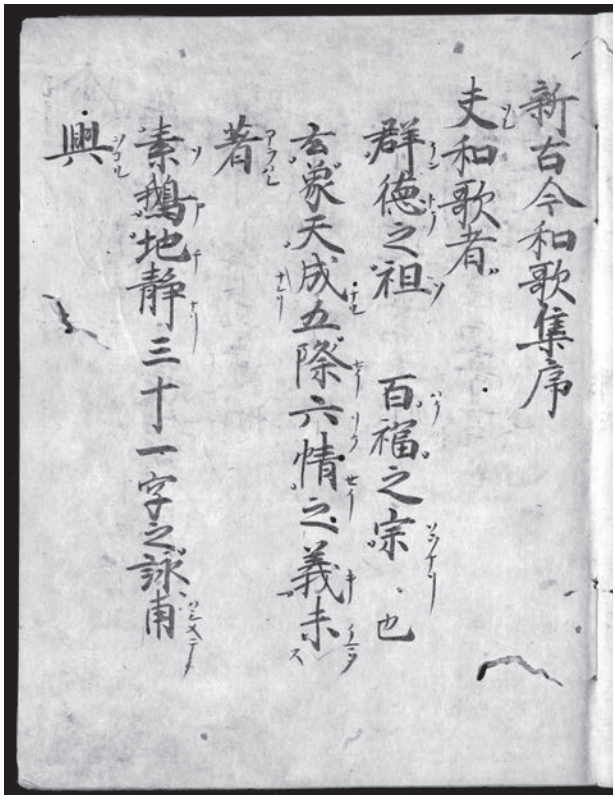
118 遇—過（筋）、歌—哥（筋）
119 以—ナシ（筋）、昌—唱（筋）



（九ウ）

120 嗟乎人丸既没和歌不在斯哉于時
121 延喜五年歳次乙丑四月十一日臣貫之
122 等謹序

120 乎―呼（粋）、和歌―倭哥（筋）
121 乙丑―〈乙／丑〉（筋）、一―五（筋・粋）
122 謹序―解謹序（筋）

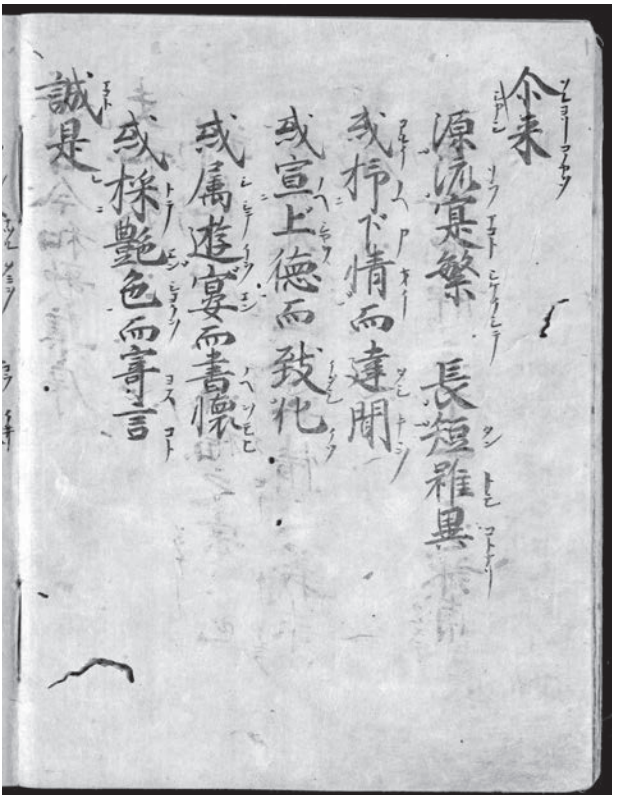


（十オ）

作品2　新古今和歌集序

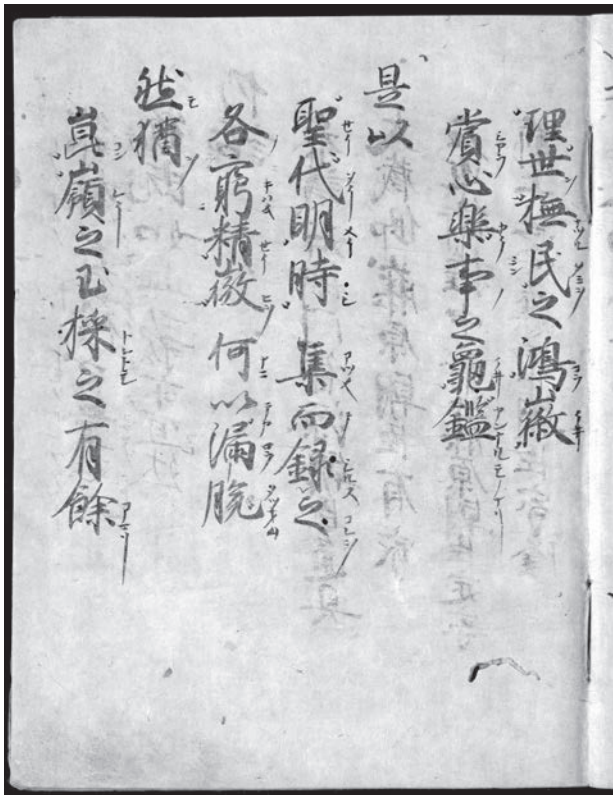
1 新古今和歌集序
2 夫和歌者
3 群徳之祖　百福之宗　也
4 玄象天成五際六情之義未
5 著
6 素鵝地静三十一字之詠甫
7 興

1 歌―謌
2 歌―謌



（十ウ）

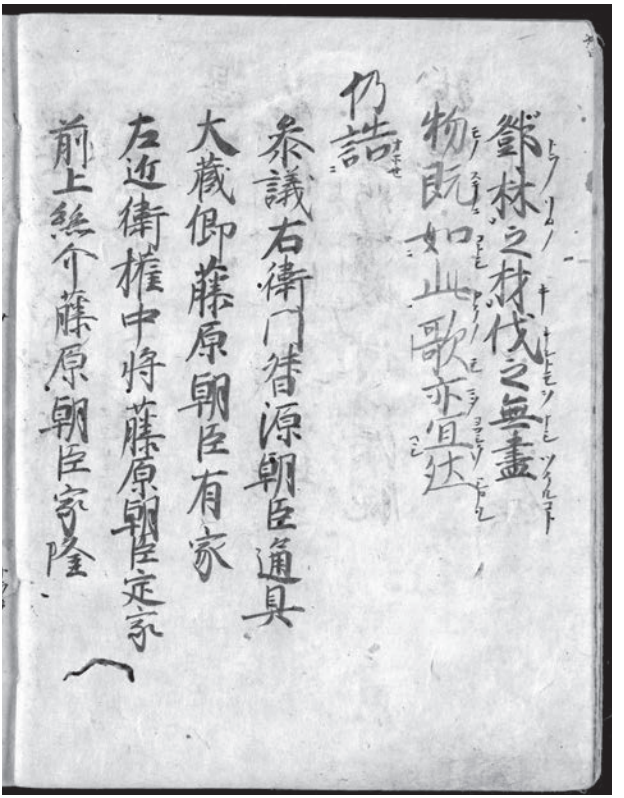
8 尓来
9 源流寔繁　長短雖異
10 或抒下情而達聞
11 或宣上德而致化
12 或属遊宴而書懐
13 或採艶色而寄言
14 誠是



（十一オ）

15　理世撫民之鴻徽
16　賞心樂事之龜鑑
17 是以
18　聖代明時　集而録之
19　各窮精微　何以漏脱
20 然猶
21　崑嶺之玉採之有餘

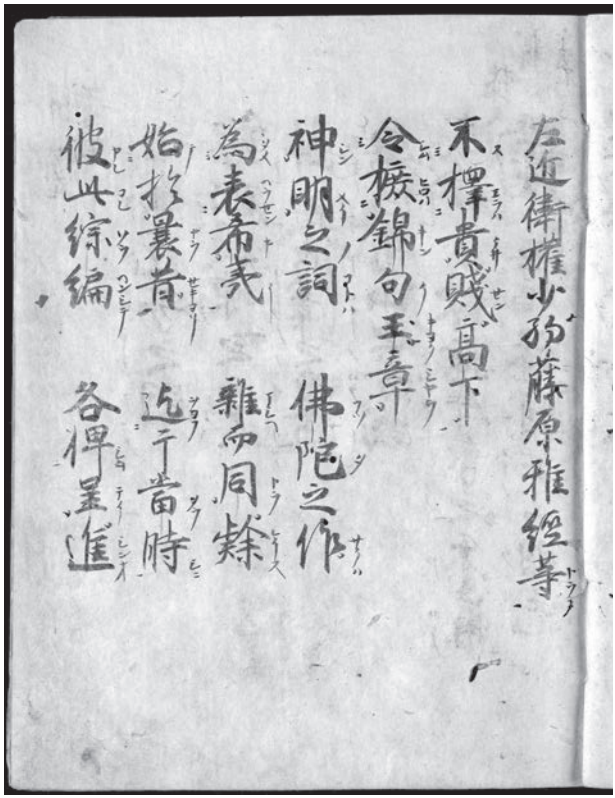
16 鑑―鑑者也
19 ※「窮」のカナ点「キハメ」の「メ」に「ム」を上書しているか。



（十一ウ）

22　鄧林之材伐之無盡
23　物既如此歌亦宜然
24　仍誥
25　参議右衛門督源朝臣通具
26　大蔵卿藤原朝臣有家
27　左近衛権中将藤原朝臣定家
28　前上総介藤原朝臣家隆

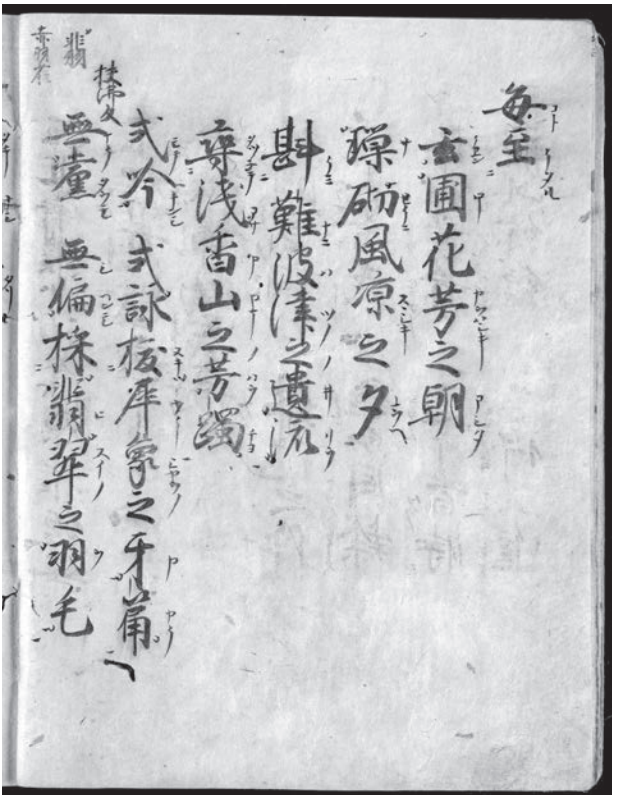
23歌―哥



（十二オ）

29　左近衛権少将藤原雅經等
30　不擇貴賤高下
31　令摭錦句玉章
32　神明之詞　佛陀之作
33　為表希夷　雜而同隷
34　始於曩昔　迄于當時
35　彼此綜編　各俾呈進

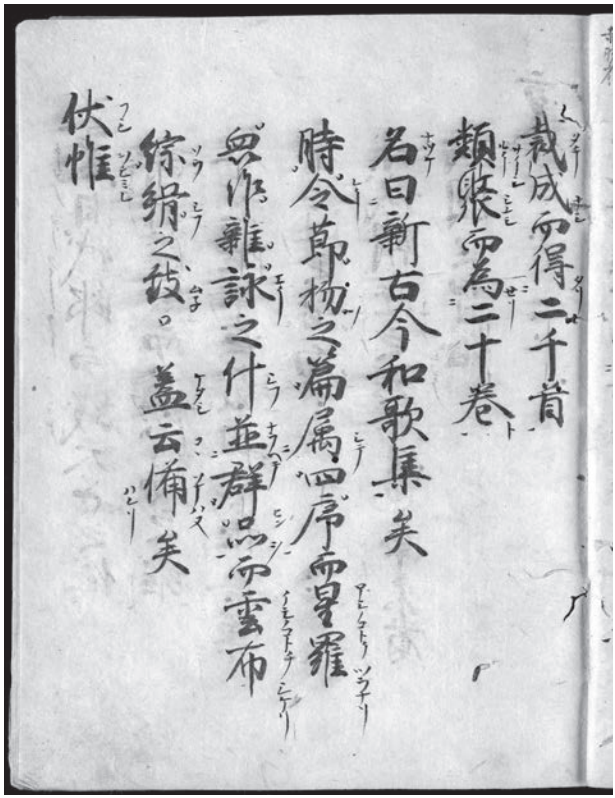
29※「等」のカナ点「ニ」が虫損のため「ノ」の如くに見える。
32陀―陁
35綜―総



（十二ウ）

36 毎至
37 玄圃花芳之朝
38 璅砌風涼之夕
39 斟難波津之遺流
40 尋浅香山之芳躅
41 式吟　式詠抜犀象之牙角
42 無黨　無偏採翡翠之羽毛

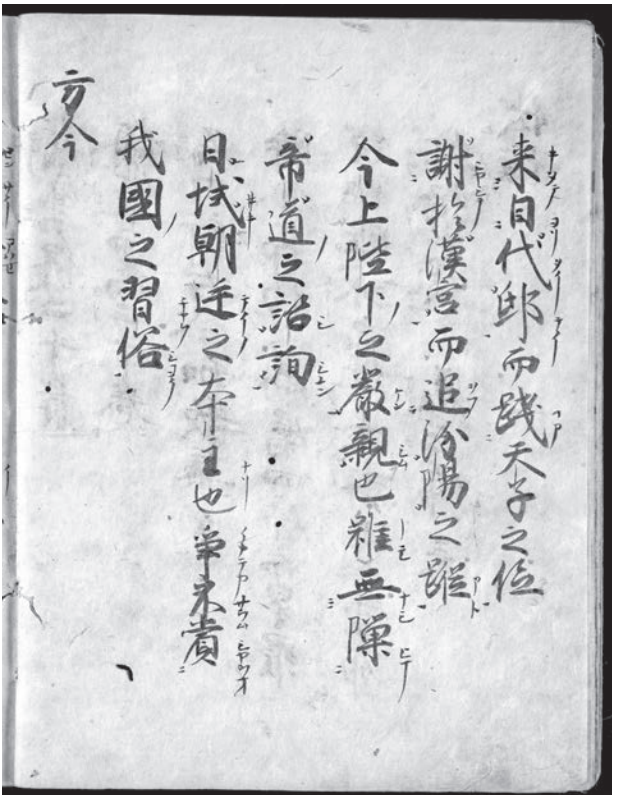
41角―筩（底）（誤写と見て校訂）
※「抜」のヲコト点「ム」の位置にあるのは読点と見る。
42※上欄書入「翡／扶沸反／赤羽衣」（「翡」についての注）


裁成而得二千首
類聚而為二十卷
名曰新古今和歌集矣
時令節物之篇属四序而星羅
衆作雑詠之什並群品而雲布
綜緝之致。蓋云備矣
伏惟

（十三オ）

43　裁成而得二千首
44　類聚而為二十卷
45　名曰新古今和歌集矣
46　時令節物之篇属四序而星羅
47　衆作雑詠之什並群品而雲布
48　綜緝之致　蓋云備矣
49　伏惟

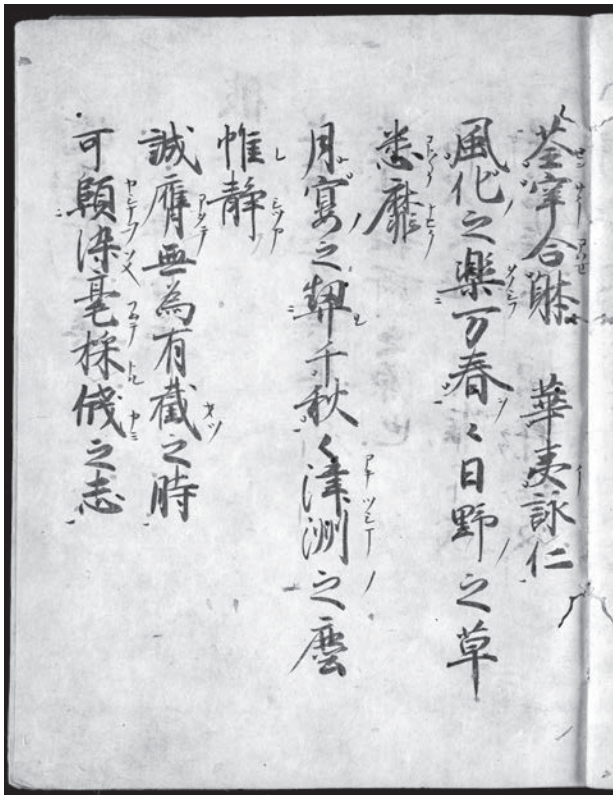
45　歌―哥
47　※「品」のヲコト点不審、「品」の振仮名「ヒン」は後筆。
48　※「致」の下に声点と同大の墨の圏点あり。



（十三ウ）

50 来自代邸而踐天子之位
51 謝於漢宮而追汾陽之蹤
52 今上陛下之嚴親也雖無隙
53 帝道之諮詢
54 日域朝廷之本主也爭不賞
55 我國之習俗
56 方今

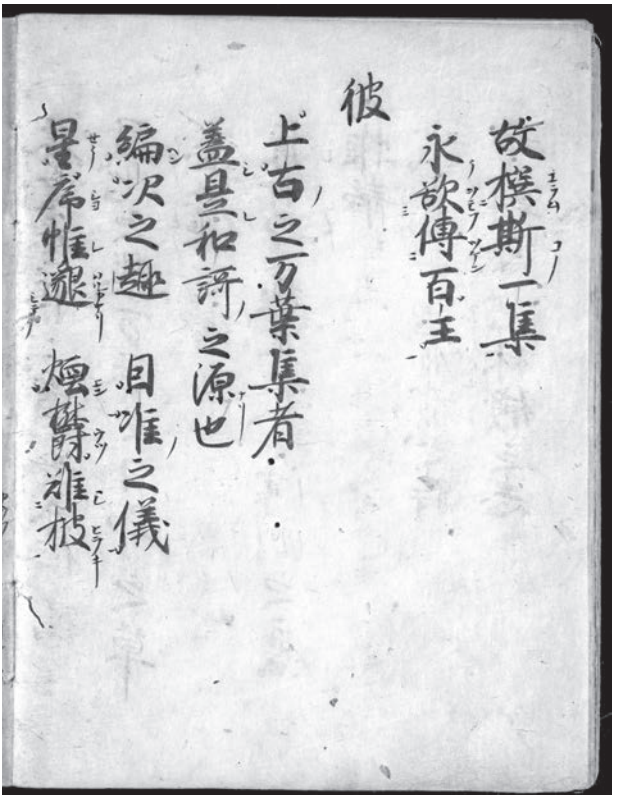
50邸—都



（十四オ）

57　荃宰合躰　華夷詠仁
58　風化之樂万春々日野之草
59　悉靡
60　月宴之契千秋々津洲之塵
61　惟静
62　誠膺無為有截之時
63　可頤染毫採戔之志

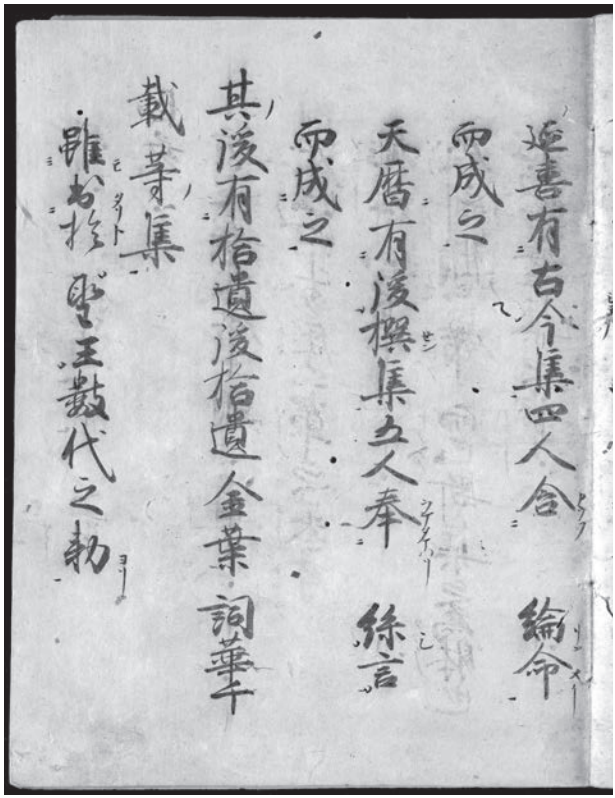
63採―操



（十四ウ）

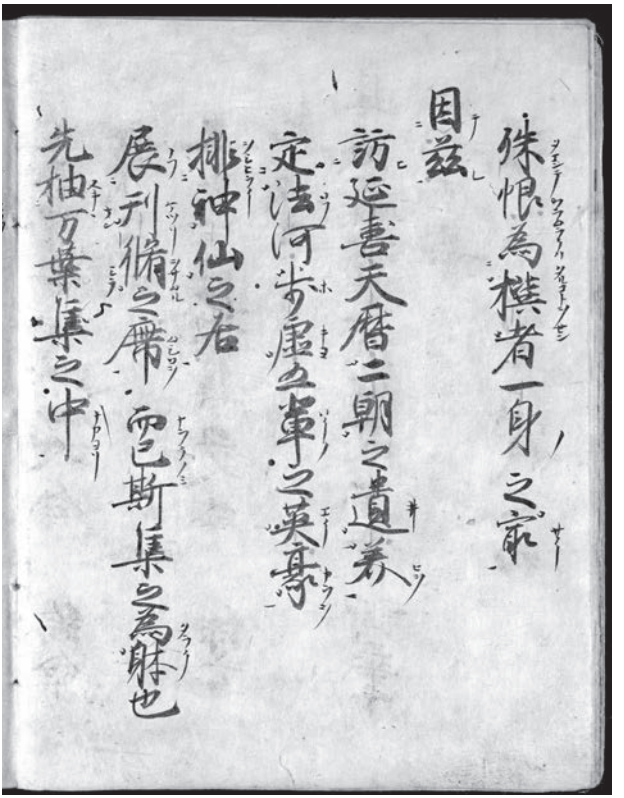
64　故撰斯一集
65　永欲傳百王
66　彼
67　上古之万葉集者
68　蓋是和謌之源也
69　編次之趣　因准之儀
70　星序惟邈　煙欝難披

64※「一」のヲコト点不審。
68　謌―哥
69　趣―起


延喜有古今集四人合　綸命
而成之
天暦有後撰集五人奉　絲言
而成之
其後有拾遺後拾遺金葉詞華千
載等集
雖出於聖王數代之勅

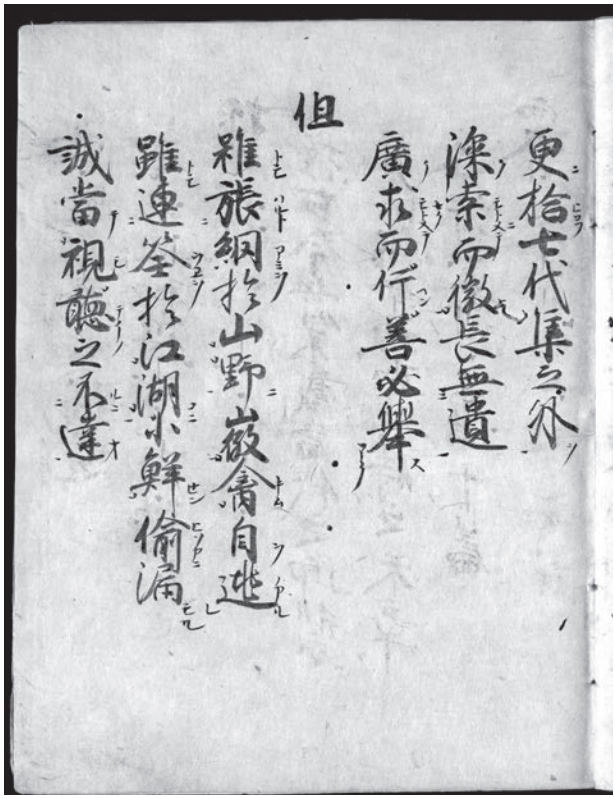
（十五オ）

71　延喜有古今集四人合　綸命
72　而成之
73　天暦有後撰集五人奉　絲言
74　而成之
75　其後有拾遺後拾遺金葉詞華千
76　載等集
77　雖出於聖王數代之勅



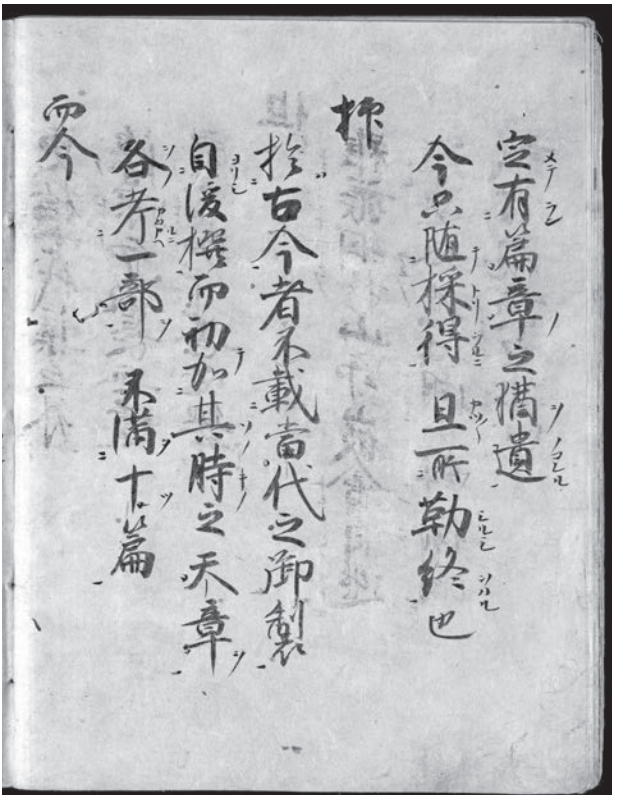
（十五ウ）

78　殊恨為撰者一身之最
79　因茲
80　訪延喜天暦二朝之遺美
81　定法河歩虚五輩之英豪
82　排神仙之居
83　展刊脩之席　而已斯集之為躰也
84　先抽万葉集之中



（十六オ）

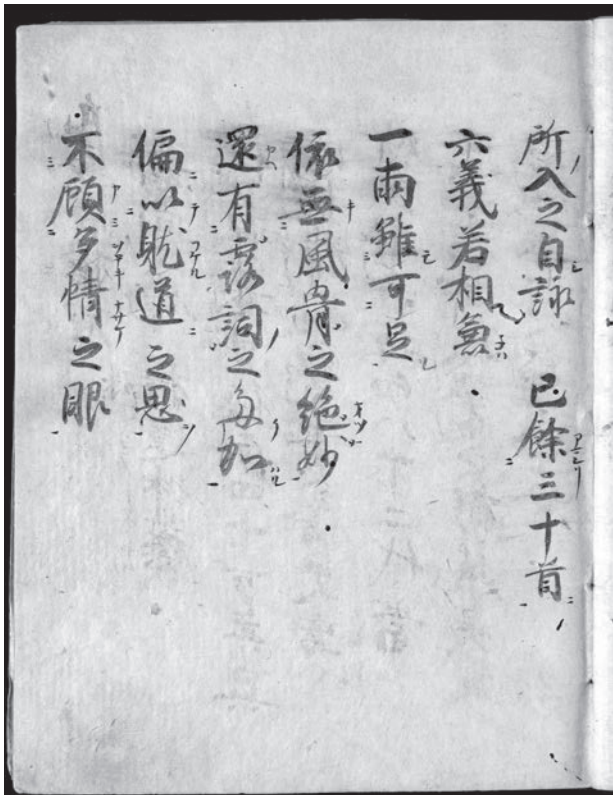
85 更拾七代集之外
86 深索而微長無遺
87 廣求而片善必擧
88 但
89 雖張網於山野微禽自逃
90 雖連筌於江湖小鮮偷漏
91 誠當視聽之不達



（十六ウ）

92　定有篇章之猶遺｜
93　今只隨採得　且所勒終也
94　抑
95　於古今者不載當代之御製
96　自後撰而初加其時之天章
97　各考一部　不滿十篇
98　而今

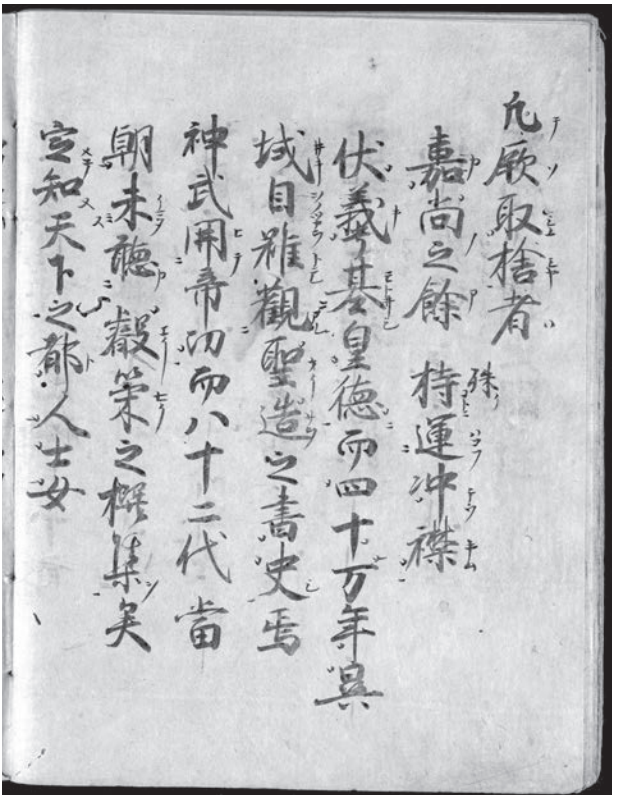
92　遺―ナシ
97　滿―漏



（十七オ）

99　所入之自詠　已餘三十首
100　六義若相兼
101　一両雖可足
102　依無風骨之絶妙
103　還有露詞之多加
104　偏以耽道之思
105　不顧多情之眼

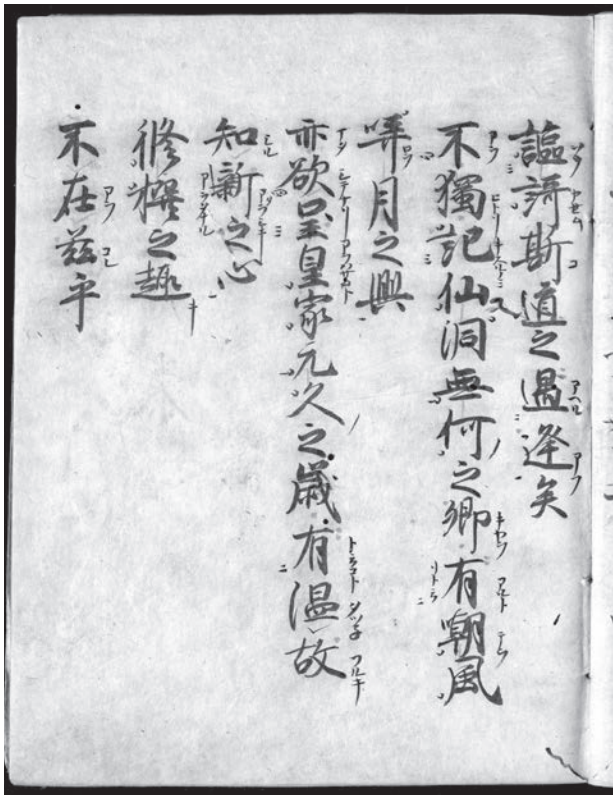
103※「加」の「ハ」のヲコト点不審。



（十七ウ）

106 凡厥取捨者
107 嘉尚之餘　特運冲襟
108 伏羲基皇德而四十万年異
109 域自雖観聖造之書史焉
110 神武開帝功而八十二代當
111 朝未聽　叡策之撰集矣
112 定知天下之都人士女

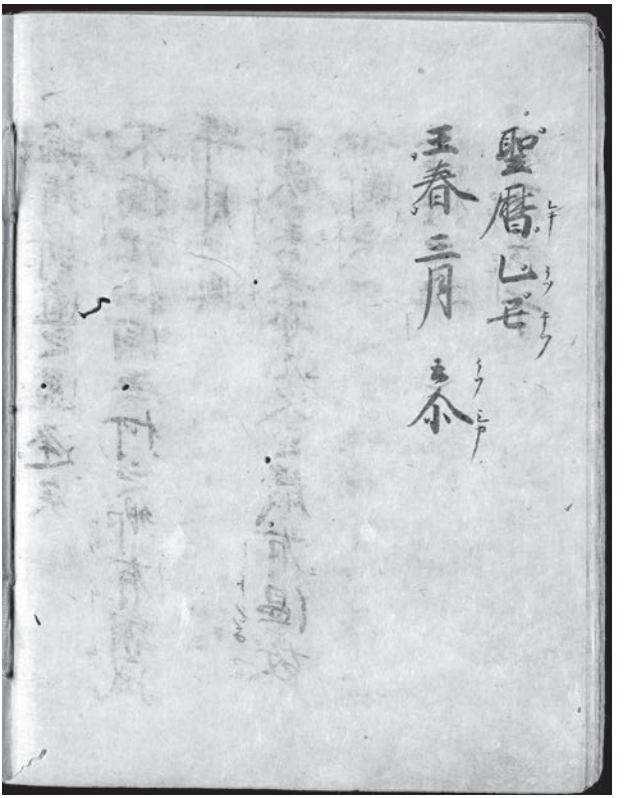
107 特―持（底）（誤写と見て校訂）
※「持」に「殊イ」と注記あり。



（十八オ）

113 謳謌斯道之遇逢矣
114 不獨記仙洞無何之鄉有嘲風
115 哢月之興
116 亦欲呈皇家元久之歳有温故
117 知新之心
118 修撰之趣
119 不在茲乎

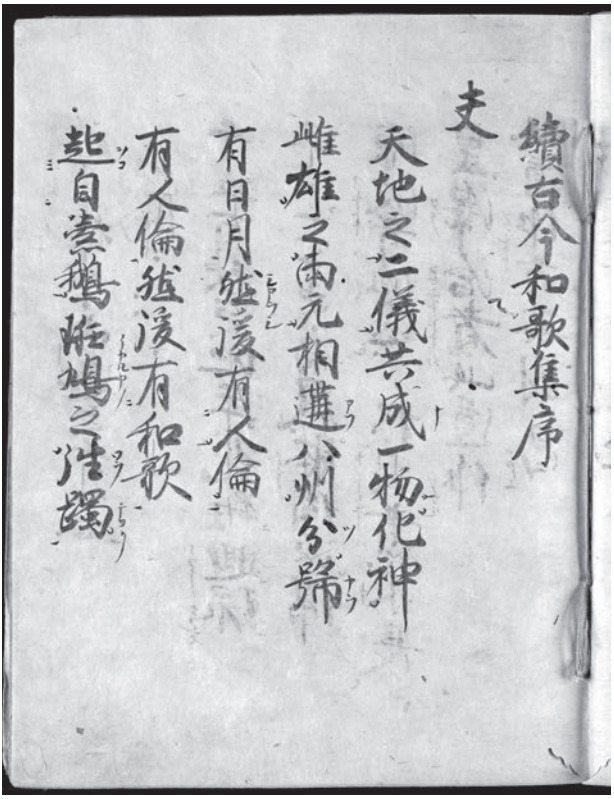
113 謌—哥
115 哢—弄



（十八ウ）

120 聖暦乙丑

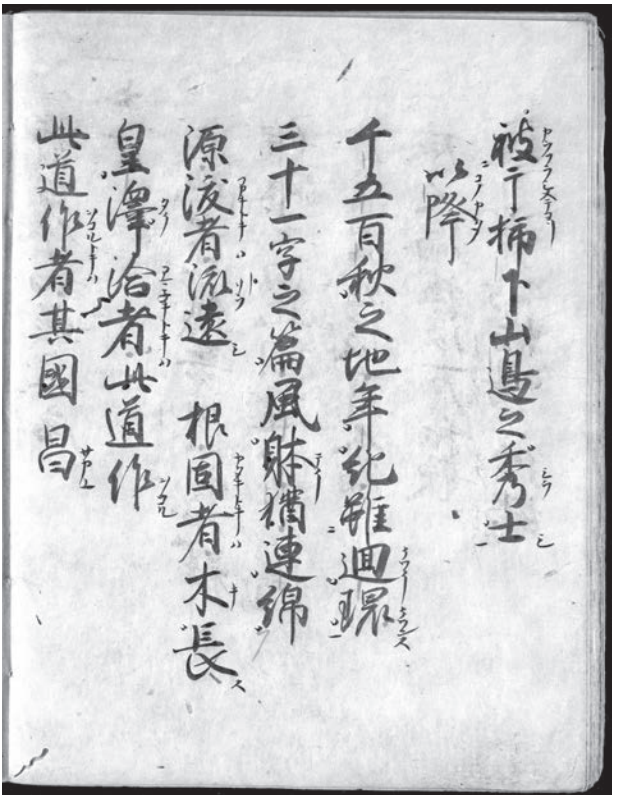
121 王春三月　云尒



（十九オ）

作品3　續古今和歌集序

1 續古今和歌集序
2 夫
3 天地之二儀共成一物化神
4 雌雄之両元相遣八州分號
5 有日月然後有人倫
6 有人倫然後有和歌
7 起自素鵝斑鳩之往躅

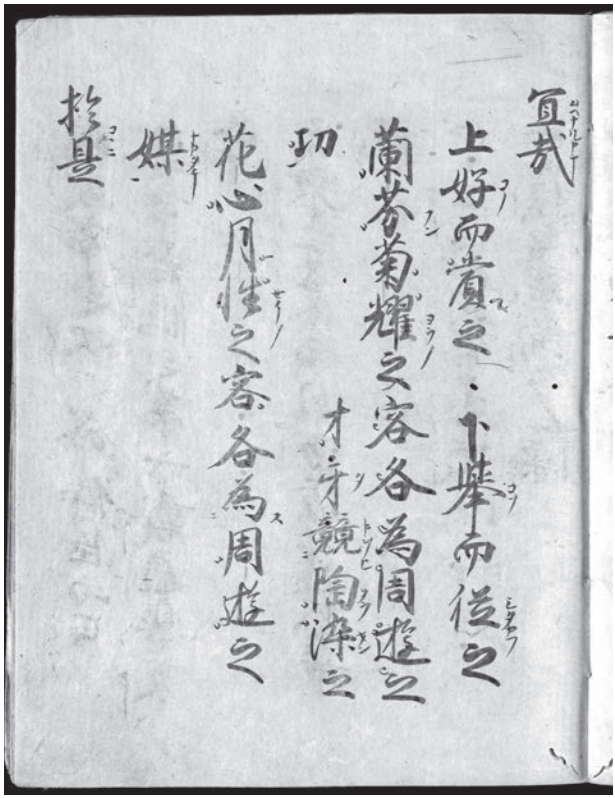


（十九ウ）

8　被于柿下山邊之秀士
9　以降
10　千五百秋之地年紀雖迴環
11　三十一字之篇風躰猶連綿
12　源浚者流遠　根固者木長
13　皇澤洽者此道作
14　此道作者其國昌

8下―本

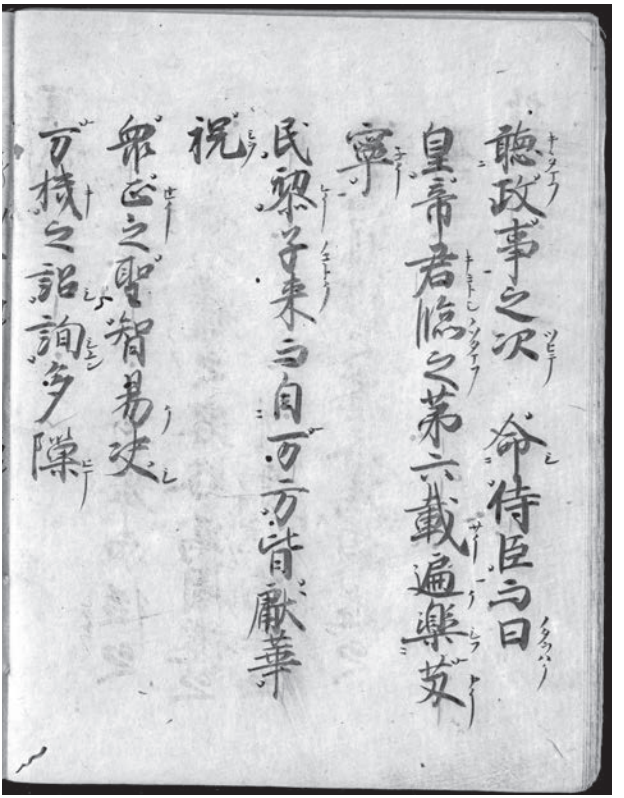
※「于」の下に切点あり。



（二十オ）

15 宜哉
16 上好而賞之　下擧而從之
17 蘭芬菊耀之才互競陶染之
18 功
19 花心月性之客各為周遊之
20 媒
21 於是

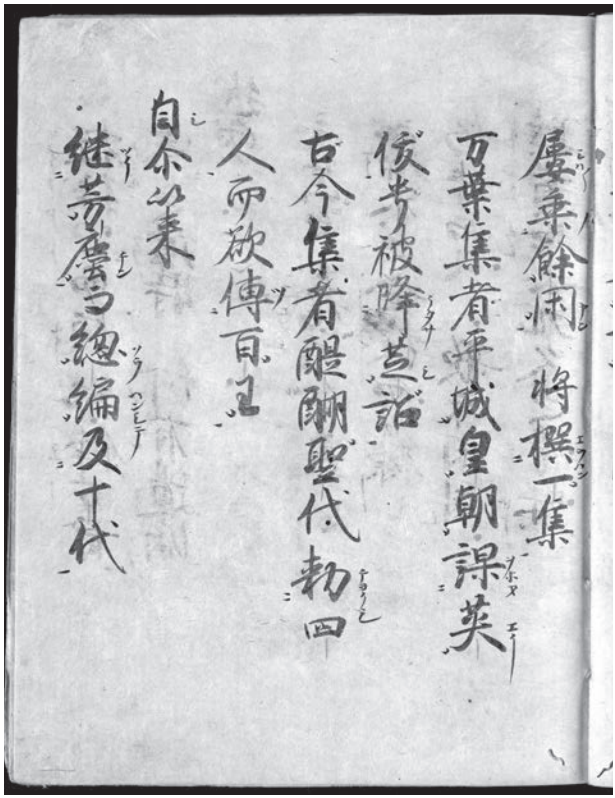
16※「賞」の送り仮名は虫損のため推読。
17※「才互競陶染之」の六字は「客各為周遊之」の六字をミセケチにして傍書。



（二十ウ）

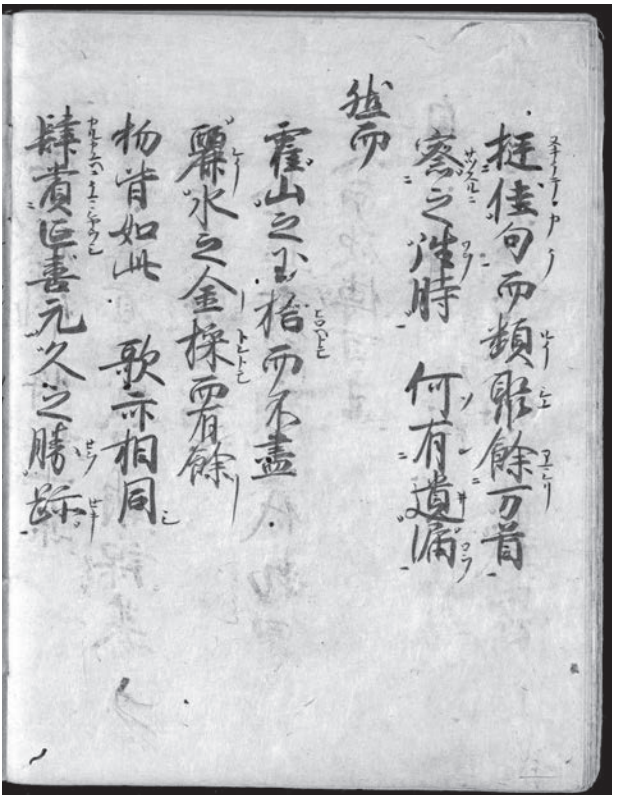
22　聽政事之次　命侍臣而曰
23　皇帝君臨之第六載遍樂艾
24　寧
25　民黎子来而自万方皆獻華
26　祝
27　衆正之聖智易決
28　万機之諮詢多隙

27※「聖」左上のヲコト点は二十一オ二行目「集」のヲコト点が映ったものか。



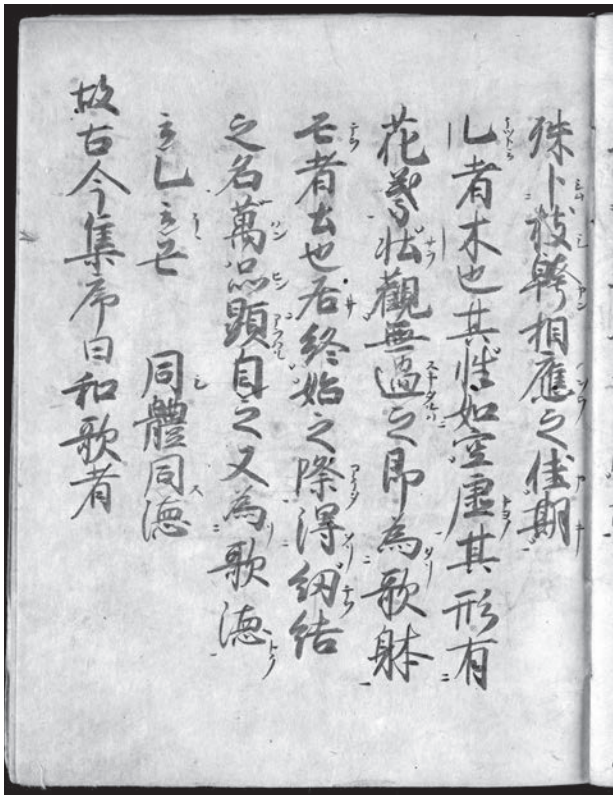
（二十一オ）

29　屢乘餘閑　將撰一集
30　万葉集者平城皇朝課英
31　俊兮被降芝詔
32　古今集者醍醐聖代勅四
33　人而欲傳百王
34　自尓以来
35　継芳塵而總編及十代



（二十一ウ）

36 挺佳句而類聚餘万首
37 察之往時　何有遺漏
38 然而
39 霍山之玉拾而不盡
40 麗水之金採而有餘
41 物皆如此　歌亦相同
42 肆賞延喜元久之勝跡

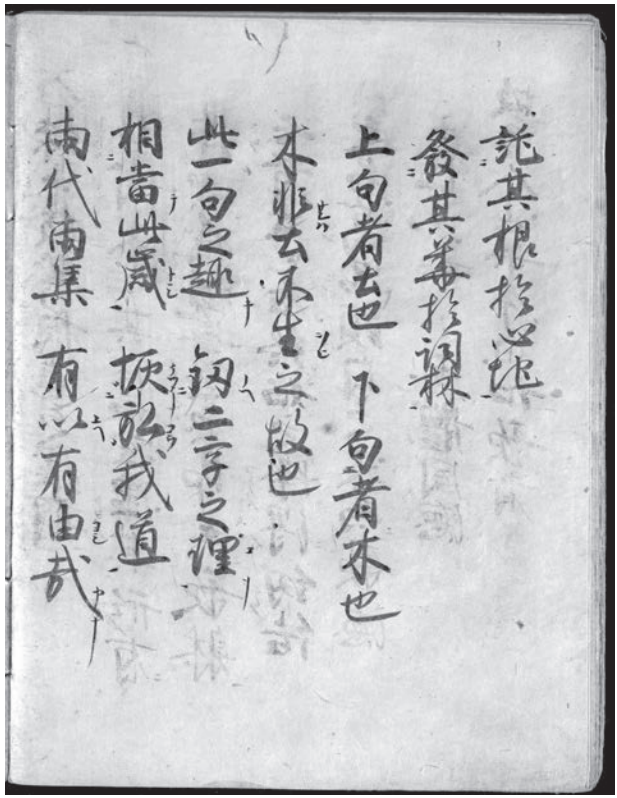


殊卜枝幹相應之佳期
乙者木也其性如空虚其形有
花葉壯觀無過之即為歌躰
丑者土也居終始之際得紐結
之名萬品顕自之又為歌徳
云乙云丑　同體同徳
故古今集序曰和歌者

（二十二オ）

43　殊卜枝幹相應之佳期
44　乙者木也其性如空虚其形有
45　花葉壯観無過之即為歌躰
46　丑者土也居終始之際得紐結
47　之名萬品顕自之又為歌徳
48　云乙云丑　同體同徳
49　故古今集序曰和歌者

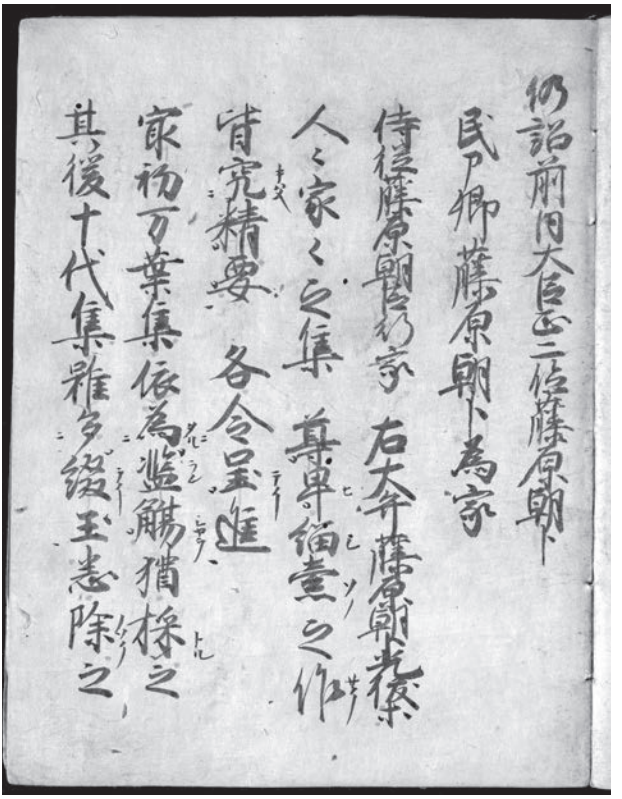
44其―厥



（二十二ウ）

50　託其根於心地
51　發其華於詞林
52　上句者土也　下句者木也
53　木非土不生之故也
54　此一句之趣　叙二字之理
55　相當此歳　恢弘我道
56　両代両集　有以有由哉

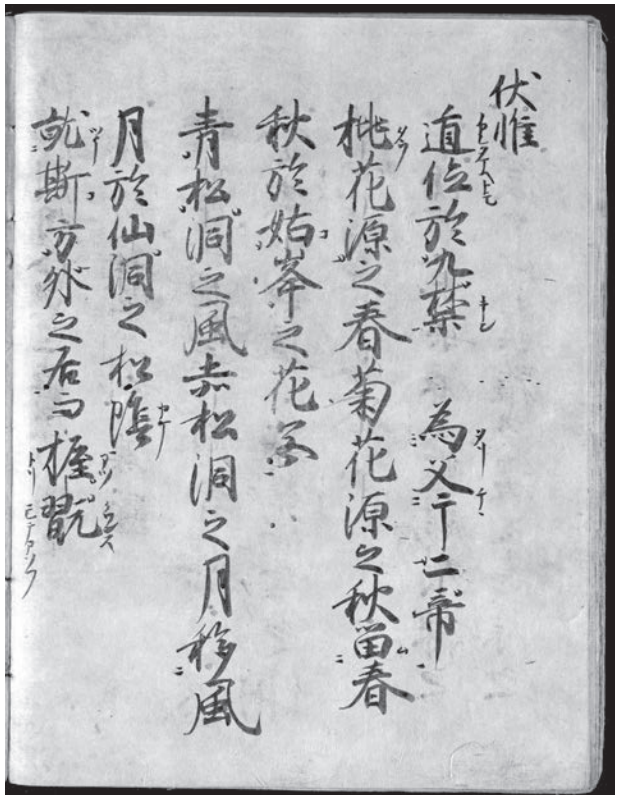
54叙―釵（底）（誤写と見て校訂）。



（二十三オ）

57 仍詔前内大臣正二位藤原朝臣
58 民部卿藤原朝臣為家
59 侍従藤原朝臣行家　右大弁藤原朝臣光俊等
60 人々家々之集　尊卑縮素之作
61 皆究精要　各令呈進
62 最初万葉集依為濫觴猶採之
63 其後十代集雖多綴玉悉除之

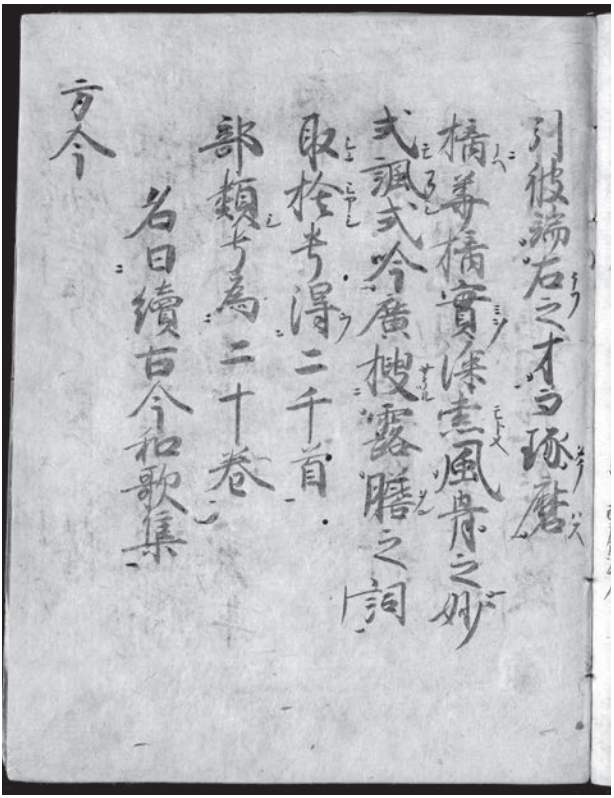
57正二位―ナシ
58民部卿―前大納言



（二十三ウ）

64 伏惟
65 遁位於九禁　為父于二帝
66 桃花源之春菊花源之秋留春
67 秋於姑峯之花色
68 青松洞之風赤松洞之月移風
69 月於仙洞之松陰
70 就斯方外之居而握翫

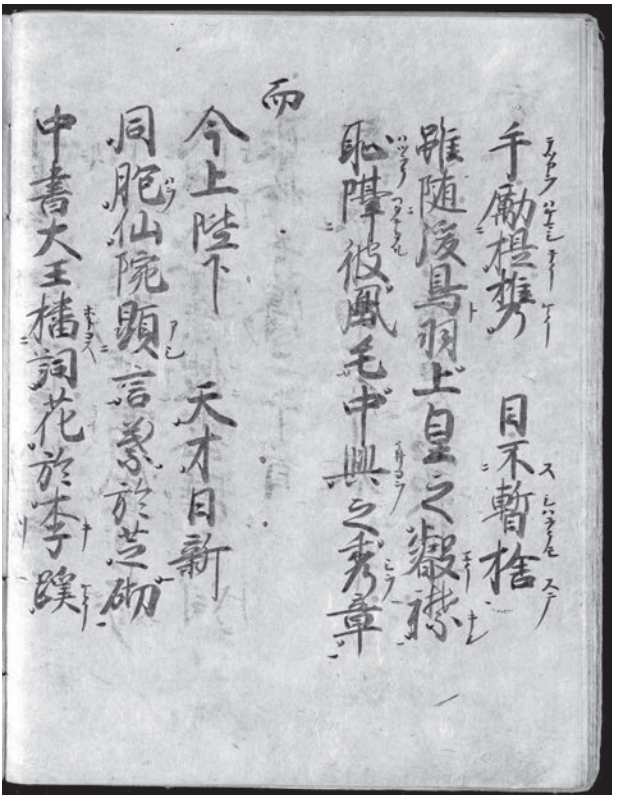
68洞―澗（二ヶ所とも）



（二十四オ）

71 引彼端右之才而琢磨
72 摘華摘實深索風骨之妙
73 式諷式吟廣搜露膽之詞
74 取捨兮得二千首
75 部類兮為二十卷
76 名曰續古今和歌集
77 方今

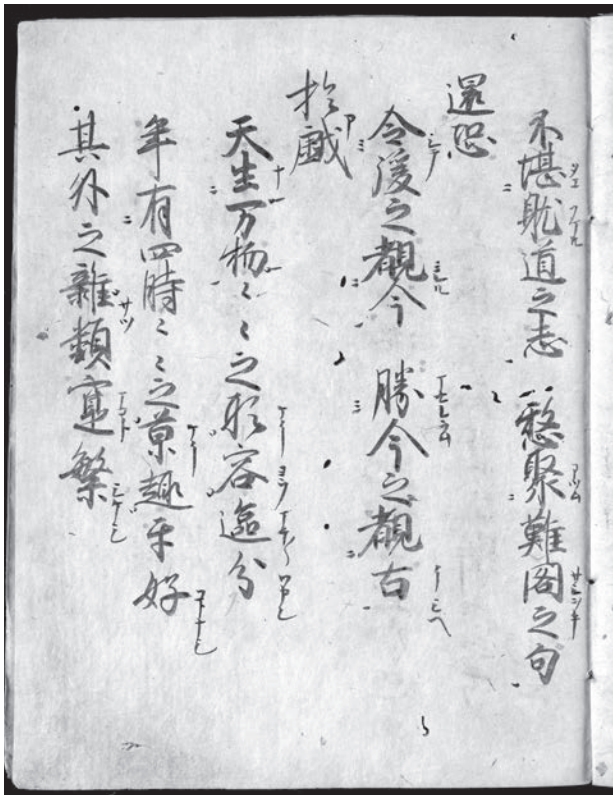
73式―或（二ヶ所とも）



（二十四ウ）

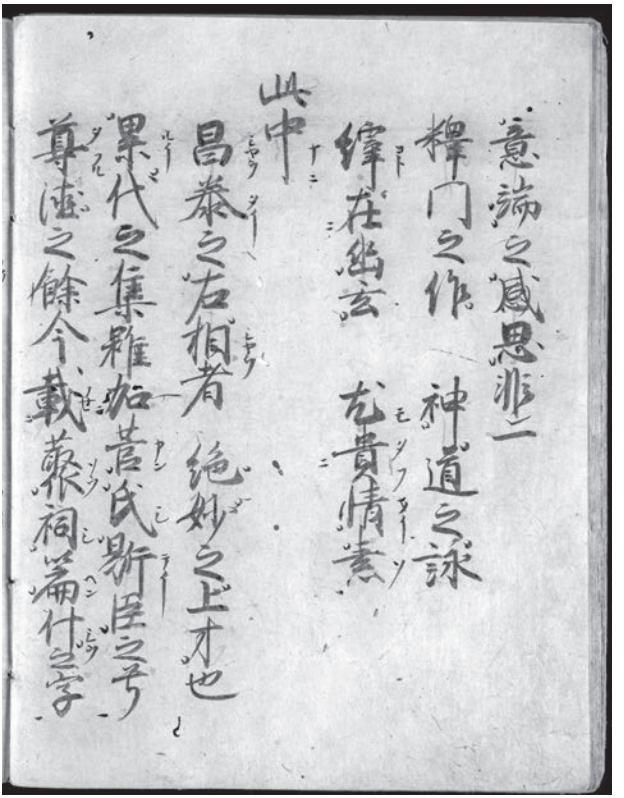
78 手勵提携　目不暫捨
79 雖随後鳥羽上皇之叡襟
80 恥隔彼鳳毛中興之秀章
81 而
82 今上陛下　天才日新
83 同胞仙院顕言葉於芝砌
84 中書大王播詞花於李蹊

84 播―積



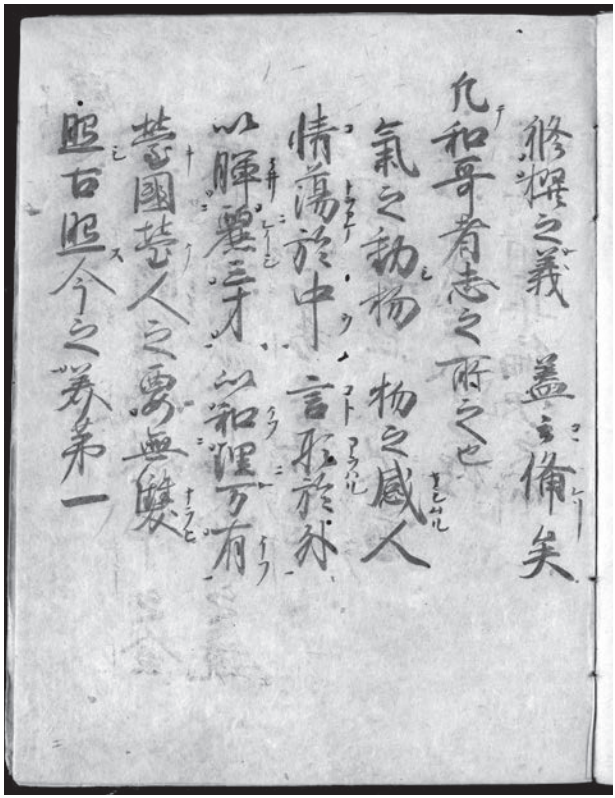
（二十八オ）

85　不堪恥道之志　慙聚難閣之句
86　還恐
87　令後之覩今　勝今之覩古
88　於戲
89　天生万物々々之形容區分
90　年有四時々々之景趣互好
91　其外之雜類寔繁



（二十八ウ）

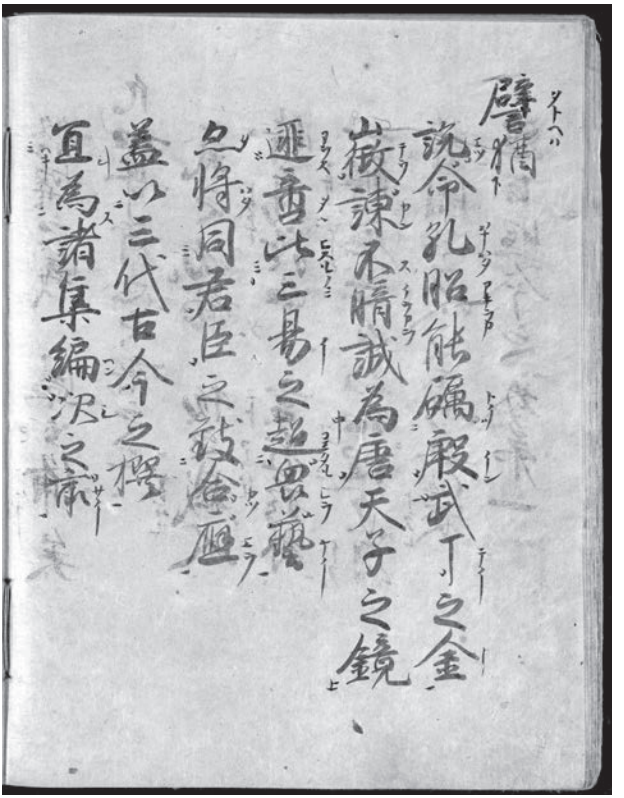
92　意端之感思非一
93　釋門之作　神道之詠
94　縡在幽玄　尤貴情素
95　此中
96　昌泰之右相者　絶妙之上才也
97　累代之集雖加菅氏鼎臣之号
98　尊德之餘今載藂祠篇什之字



（二十六オ）

99　修撰之義　蓋云備矣
100　凡和哥者志之所之也
101　氣之動物　物之感人
102　情蕩於中　言形於外
103　以暉麗三才　以和理万有
104　瑩國瑩人之要無雙
105　照古照今之美第一

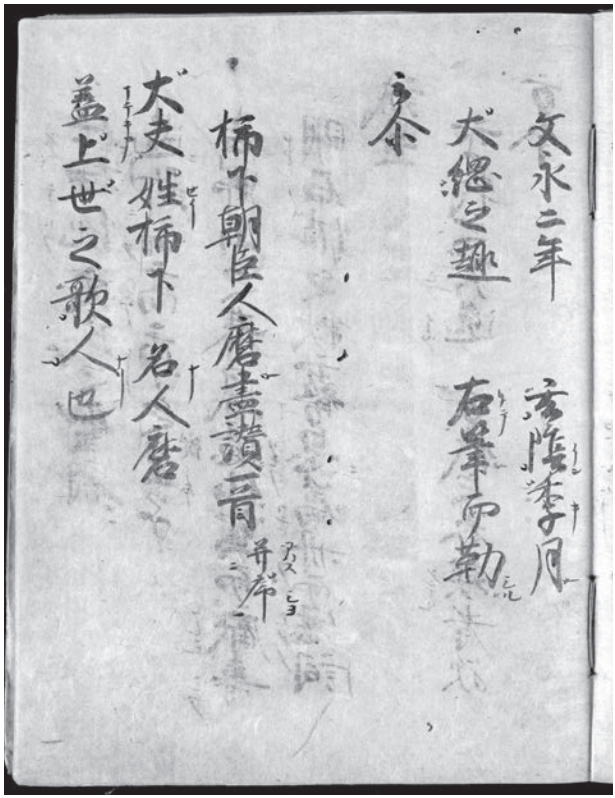
100　哥―歌
102　※「蕩」の訓、本来「トラケ」とあるべし。



（二十六ウ）

106 譬猶
107 説命孔昭能礪殷武丁之金
108 徴諫不暗誠為唐天子之鏡
109 匪啻比三易之超衆藝
110 亦将同君臣之致合應
111 蓋以三代古今之撰
112 宜為諸集編次之最

106※「譬猶」の間のレ点不審。



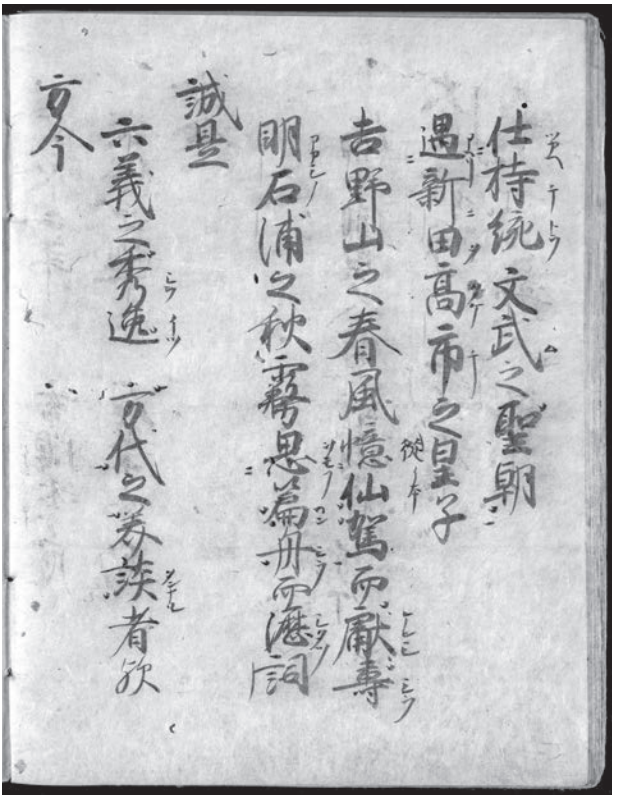
（二十七オ）

113　文永二年　玄陰季月
114　大綱之趣　右筆而勒
115云尒

作品4　柿下朝臣人麿畫讃一首〈幷序〉

1　柿下朝臣人麿畫讃一首〈幷序〉
2大夫姓柿下　名人麿
3蓋上世之歌人也

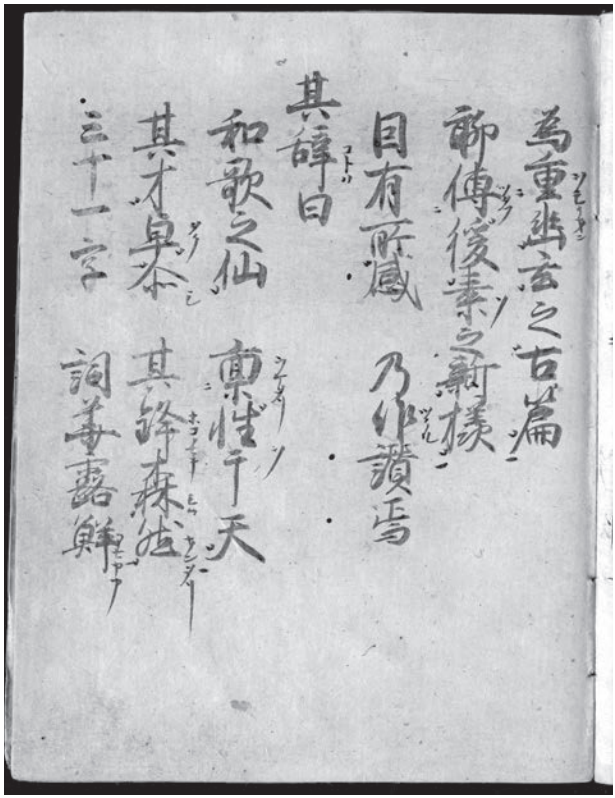
1麿（続・真）―磨（底）、一首―ナシ（続）、（作者名ナシ）―敦光朝臣（続）
3歌―謌（続）



（二十七ウ）

4　仕持統文武之聖朝
5　遇新田高市之皇子
6　吉野山之春風｜従仙駕而獻｜壽
7　明石浦之秋霧思｜篇舟而瀝詞
8　誠是
9　六義之秀逸　万代之美談者歟
10　方今

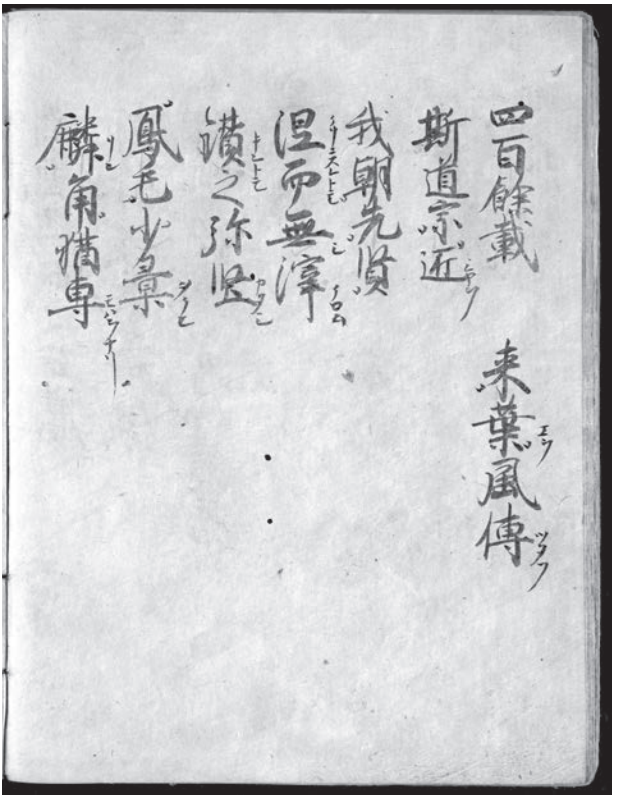
6　従（続・真）―憶（底）、獻―戯（真）
※憶の右傍に「／従〈イ本〉」と注記あるのと対校本とに従い、校訂した。あわせて「駕」のヲコト点を変更した。
7　篇―扁（続・真）


為重幽玄之古篇
聊傳後素之新様
因有所感　乃作讃焉
其辞曰
和歌之仙　稟性于天
其才卓尒　其鋒森然
三十一字　詞華露鮮

（二十五オ）

11　為重幽玄之古篇
12　聊傳後素之新様
13　因有所感　乃作讃焉
14　其辞曰
15　和歌之仙　稟性于天
16　其才卓尒　其鋒森然
17　三十一字　詞華露鮮

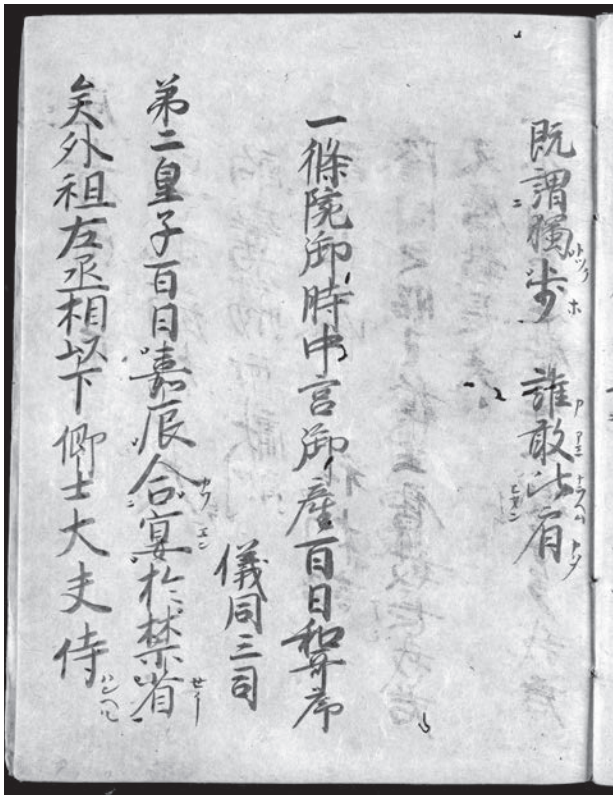
12　新様―新之様（之ミセケチ）（続）
14　辞―詞（真）
15　歌―謌（続）・哥（真）



（二十五ウ）

18 四百餘載　来葉風傳
19 斯道宗匠
20 我朝先賢
21 涅而無滓
22 鑽之弥堅
23 鳳毛少彙
24 麟角猶専

21滓―緇（続）



（二十九オ）

25　既謂獨歩　誰敢比肩

作品5　一條院御時中宮御産百日和哥序

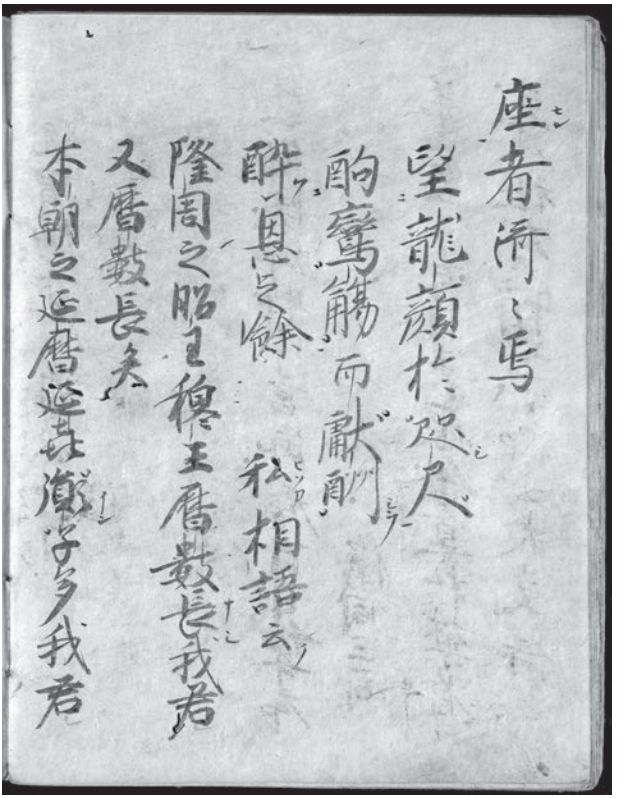
1　一條院御時中宮御産百日和哥序

2　　儀同三司

3　第二皇子百日嘉辰合宴於禁省

4　矣外祖左丞相以下卿士大夫侍

25（次行に）作者大学頭敦光朝臣（真）

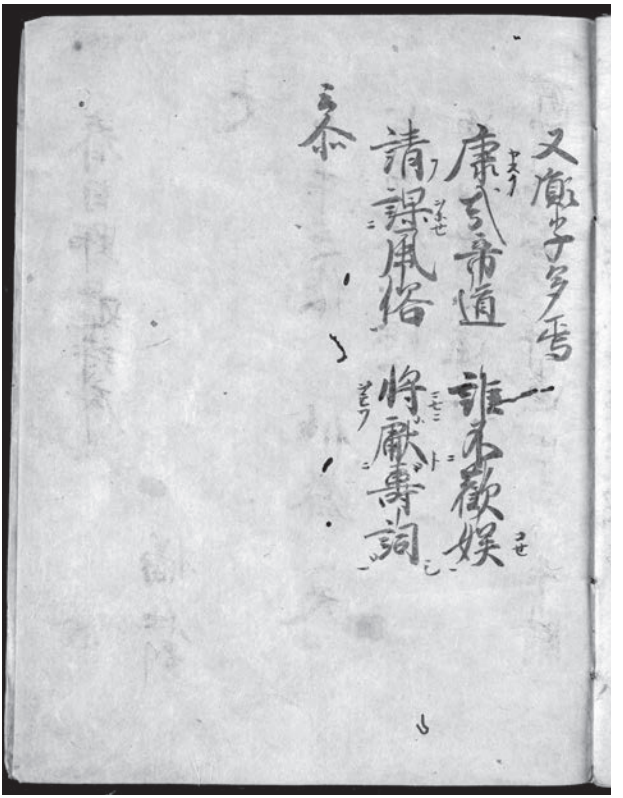


座者済々焉
望龍顔於咫尺
酌鸞觴而獻酬
醉恩之餘　私相語云
隆周之昭王穆王暦數長我君
又暦數長矣
本朝之延暦延喜胤子多我君

（二十九ウ）

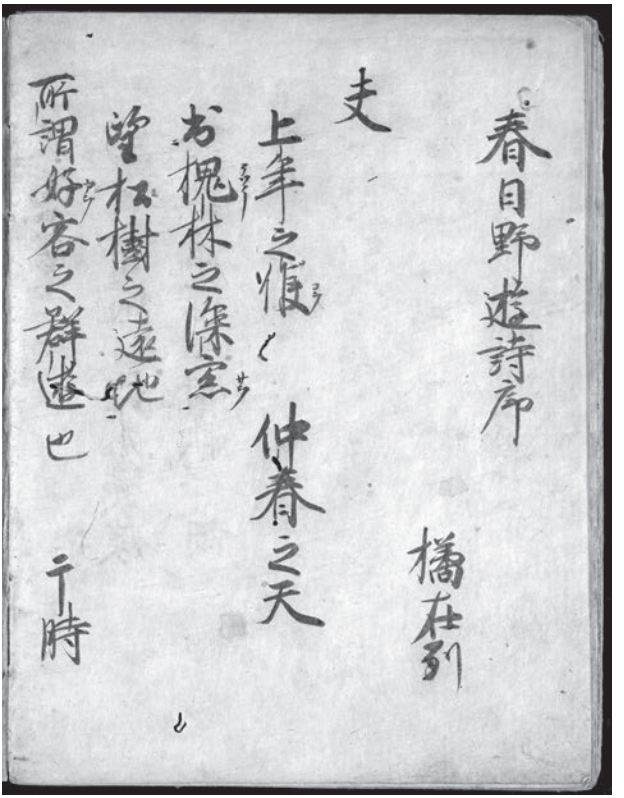
5 座者済々焉
6 望龍顔於咫尺
7 酌鸞觴而獻酬
8 醉恩之餘　私相語云
9 隆周之昭王穆王暦數長我君
10 又暦數長矣
11 本朝之延暦延喜胤子多我君

5 ※「座」の振り仮名「サン」不審だが
　そのままとする。
9 長―長焉
10 矣―焉
11 多―多矣



（三十オ）

12　又胤子多焉
13　康哉帝道　誰不歓娯
14　請課風俗　将獻壽詞
15　云尒



（三十ウ）

作品6　春日野遊詩序

1　春日野遊詩序

2　橘在列

3　夫

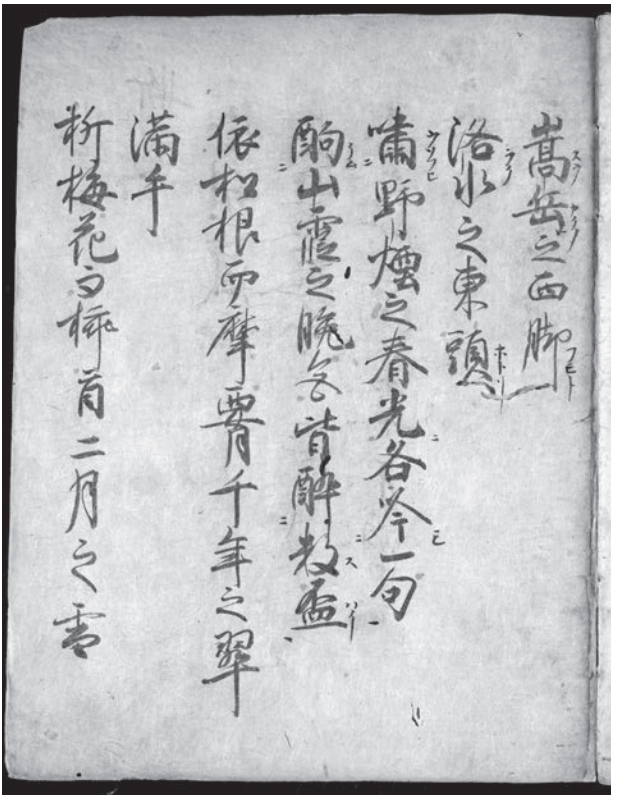
4　上年之候　仲春之天

5　出槐林之深窓

6　望松樹之遠地

7　所謂好客之群遊也　于時

1詩序―〈和漢任意〉

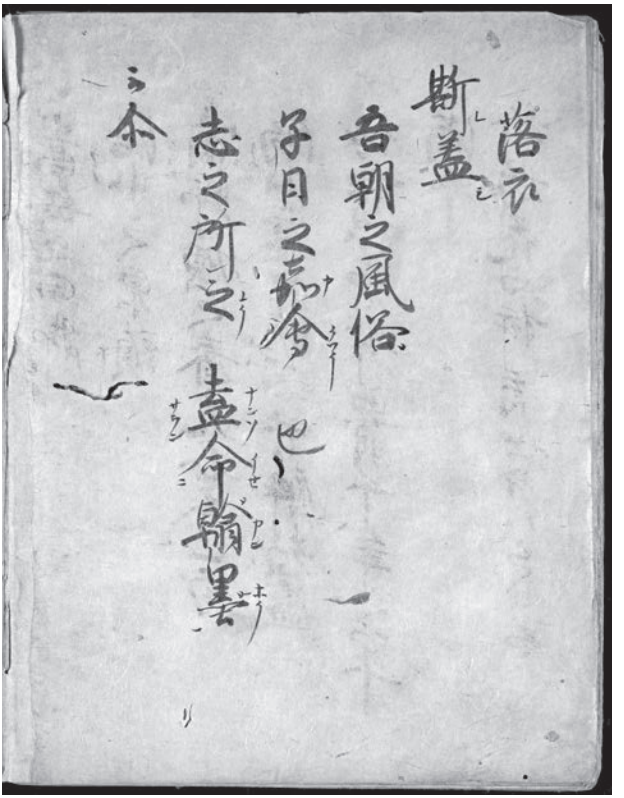


嵩岳之西脚
洛水之東頭
嘯野煙之春光各吟一句
酌山霞之晩色皆醉数盃
依松根而摩腰千年之翠
満手
折梅花而挿首二月之雪

（三十一オ）

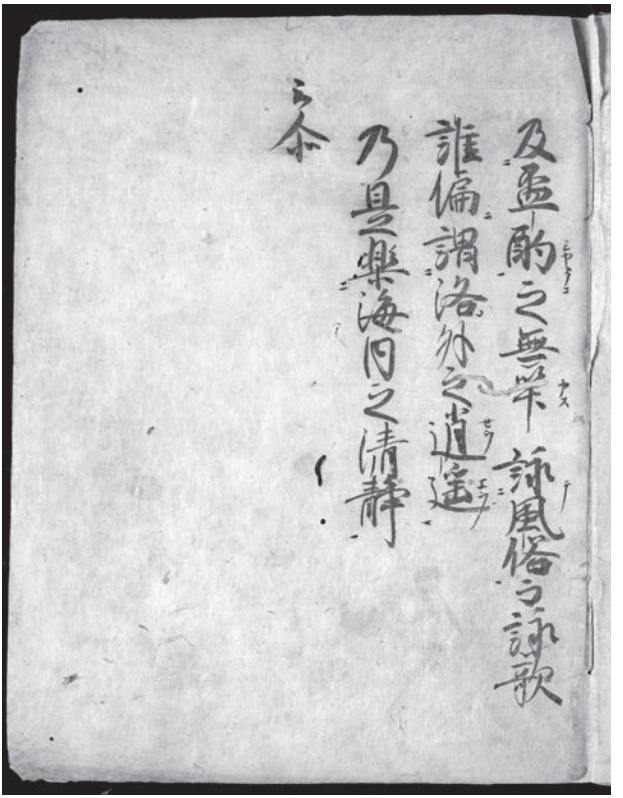
8　嵩岳之西脚
9　洛水之東頭
10　嘯野煙之春光各吟一句
11　酌山霞之晩色皆醉数盃
12　依松根而摩腰千年之翠
13　満手
14　折梅花而挿首二月之雪

12依―倚



（三十一ウ）

15　落衣
16　斯蓋
17　吾朝之風俗
18　子日之嘉会　也
19　志之所之　盍命翰墨
20　云尓



（三十二オ）

作品7（初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序）

（前欠）

1　及盃酌之無竿　詠風俗而詠歌

2　誰偏謂洛外之逍遥

3　乃是樂海内之清静

4云尓

1詠―記

【訓読】

作品1　古今和歌序

古今和歌序　紀淑望

夫（れ）、和歌は」其の根を心地に託け」其の花を詞林に發（する）　者なり」人の世に在（る）　為無（き）に能（は）ず」思慮、遷り易く　哀樂、相變ず」感、志に生り　詠、言に彰はる（一オ）」是を以て」逸せる者は其（の）詞樂し　怨みたる者は其の吟悲し」以て懷ひを述ぶべく　以て憤りを發（す）べし」天地を動（か）し　鬼神を感ぜしめ」人倫を化し　夫婦を和らぐるは」和歌より宜しきは莫し」和歌に、六の義有（り）。一に曰く風、二に曰（く）賦、三に曰（く）比、四に（一ウ）」曰（く）興、五に曰（く）雅、六に曰（く）頌夫の」春の鶯の花の中に囀り」秋の蟬の樹の上に吟ずるが若きは」曲折無（し）と雖（も）　各、歌謠を發す」物皆、之有り　自然の理なり」然而（も）」神の世、七代　時質に、人淳し（二オ）」情欲、分つこと無（く）　和歌、作らず」素盞烏尊【みこと】の出雲國に到るに逮むで始（め）て」三十一字の詠有（り）。今の返歌の作なり」其の後、」天【あまつ】神の孫【むまご】】　海童【わたつみの】女と雖（も）」和歌を以て情を通（ぜ）ずと（いふ）こと莫し」爰に、人代（に）及（む）で此の風、大（い）に興る。長歌、短哥、（二ウ）」旋頭、混本の類」雜體、一に非（ず）　源流、漸（く）に繁し」譬へば」雲を拂ふ樹の寸苗の煙自（り）生ひ」天を浮かべる波の一滴の露より起こるが猶【ごとし】」難波津の什、天皇に獻り（三オ）」富緒川の篇、太子に報ぜるが如（き）に至（つ）ては」或は事、神異に關り」或は興、幽玄に入（る）」但（し）、上古の歌を見（る）に」多く、古質の語を存せり」耳目の翫びと為ず」徒（ら）に、教戒の端為り（三ウ）」古の天子、良辰美景毎に、侍臣の」宴莚に預る者に詔して倭歌を獻ぜしむ君臣の情　斯に由（つ）て」見つべし。賢愚の性、是に於て相分（かれ）たり」民の欲に随（つ）て　士の才を擇ぶ所以なり」大津皇子の初（め）て詩賦を作（つ）し、詞人才」子、風を慕ひ塵を継いで彼の漢家の字を移して化（し）て」日域の俗と為し自（り）（四オ）」民の業、一（た）び改（つ）て　和歌、漸（く）に衰す【をとろふ】」然るを猶、先師柿本大夫といふ者有（り）」高く、神妙の思（ひ）を振る（つ）て」古今の間に獨歩す」山邊赤人といふ者有（り）。並に和歌の仙なり。」其の餘の【／よの】和歌を業とする者、綿綿と（し）て絶（え）ず。彼の」時、澆薄に變じ

て　人、奢淫を貴ぶに及（む）で（四ウ）」浮詞、雲のごとくに興り　艶流、泉のごとくに涌く」其の實、皆以て落ち」其の花、獨（り）以て榮ゆ」色を好（む）家、之を以て花鳥の使と為」食を乞ふ客、之を以て活計の媒と為ること有（る）に至る」故に（五オ）」半（ば）、婦人の右と為て」大夫の前に進み難（し）」近代、古風を存（する）者」纔（か）に二三人（なら）而已」然も」長短、同（じから）ず　論じて以て弁つべし」／花山の僧正は尤（も）歌の體を得たり。其の歌、花に（し）て（五ウ）」實少し、圖畫の【えにかける】好女【よきをむな】、徒（ら）に人の情を動（かす）が如（し）　／在原の」中将の歌は其の情、餘【／あまり】有（つ）て其の詞足（ら）ず、」萎める花の彩色少（し）と雖（も）、而も、薫香有（ら）むが如（し）。文林、」物を詠ず、然も其の體、俗に近し。賈人の鮮衣【あざやかなるきぬ】を著たるが如（し）」／宇治山の僧喜撰は其の詞、萎麗にして首尾」停滞せり。秋の月を望（む）に、暁の雲に遇（ふ）が如（し）　／小野小町が」歌は古の衣通姫が流なり。然（も）艶にして氣力無（し）。（六オ）」病婦の花粉を著けたるが如（し）　／大友黒主が歌は古の」猿丸大夫の次なり【／つぎなり】。頗る逸興有（つ）て艶、甚（だ）鄙し。」田夫の花の前に息むが如（し）、／此の外の氏姓流聞せる」者、勝げて数ふべからず。其の大底、皆、艶を以て本と為（し）、」和歌の趣（き）を知（ら）ざる者なり。俗人、」爭ふて榮利を事として　倭歌を用てせず」悲（しい）かな貴（くし）て将相を兼（ね）富むで金錢を餘せりと雖も（六ウ）」而も」骨、土中に朽（ち）ざるに」名、先（づ）、世上に滅えぬ」適、後輩の為に知らるゝ者は」唯、倭歌の人（なら）而已」何者」語は、人の耳に近く　義、神明に通せればなり（七オ）」昔、平城の天子、侍臣に詔（し）て万葉集を撰ばしむ。」尓し自（り）来」時、十代を歴　數、百年に過ぎたり」其の間、和歌、弃てて採【とられ】ず。風流、野相公が如く」雅情、在納言が如（し）と雖（も）」而（も）」皆、他の才に依（つ）て聞えたり　斯の道に由（つ）て顕れず（七ウ）」伏（し）て惟（も）れば陛下　御宇【あめのしたしろしめすこと】九載」仁、秋津嶋の外に流れ」恵、筑波山の陰より茂し」渕變（じ）て瀬と為る聲、寂々と（し）て口を閉ぢ」砂長（じ）て巌と為る頌、洋々と（し）て耳に満てり」既に絶えたる風を継がむことを思（ふ）」久（しく）癈たれたる道を興せむことを【をこさんと】欲す（八オ）」爰に、大内記紀友則」御書所の預紀貫之」前甲斐少目、凡河

内躬恒」左衛門府生壬生忠峯等に詔（し）て」各、家の集幷せて古来の舊歌を獻（ぜ）しむ。重（ね）て詔有（つ）て」奉る所の歌を部類（し）て勒して二十巻と為。名（づけ）て古今集と曰（ふ）」臣等（八ウ）」詞、春の花の艶よりも少く」名、秋の夜の長（き）を竊めり」況（む）や」進むでは時俗の嘲りを恐り」退（い）ては才藝の拙きことを慙づ」適、和歌の中興に遇（つ）て」以て吾が道の再び昌ふることを樂（し）む（九オ）」嗟乎、人丸既に没したれ（ど）も、和歌、斯に在（ら）ずや。時に」延喜五年歳次乙丑四月十一日、臣貫之」等謹（ん）で序（す）（九ウ）」

作品2　新古今和歌集序

新古今和歌集序

夫れ和歌は」群徳の祖　百福の宗　なり」玄象天成る【／なれ】、五際六情の義、未だ」著れず」素鵝地静（か）なり、三十一字の詠、甫めて」興る（十オ）」尓【／しかし】より来」源流寔に繁くして　長短異なりと雖も」或は下情を抒べて聞きを達し」或（は）上徳を宣べて化を致し【す】」或は遊宴に属して懐ひを書べ」或は艶色を採て言を寄す」誠に是れ（十ウ）」世を理（め）民を撫づる【理世撫民の】鴻徽」賞心樂事の龜鑑なるものなり」是を以て」聖代明時　集めて之を録す」各、精微を窮め　何を以てか漏脱せむ」然も猶」崑嶺の玉、之を採れども餘り有（り）（十一オ）」鄧林の材、之を伐れども盡くること無し」物既に、此くの如し歌も亦、宜しく然るべし」仍て」参議右衛門督源朝臣通具」大蔵卿藤原朝臣有家」左近衛権中将藤原朝臣定家」前上総介藤原朝臣家隆（十一ウ）」左近衛権少将藤原雅經等に誥せ（て）」貴賤高下を擇ばず」錦句玉章（を）摭はしむ」神明の詞　佛陀の作は」希夷を表せんが為に　雜へて同隷す」曩昔より始（め）て　當時に迄ぶ」彼此綜編して各呈進せしむ（十二オ）」玄圃に、花芳ばしき朝」璅砌に風、涼しき夕に至る毎に」難波津の遺流を斟み」浅香山の芳躅を尋ねて」式て吟じ　式（て）詠ず、犀象の牙角を抜づ」黨も無く　偏も無し、翡翠の羽毛を採（る）（十二ウ）」裁ち【さいし】成して二千首を得たり」類聚して二十巻と為り」名づけて新古今和歌集と曰（ふ）」時令節物の篇、四序（に）属して星のごとくに羅なり」衆作雜詠の什、群品を並べて雲のごとくに布けり」綜緝の致　蓋し、云に備は（ん）ぬ【はれり】」伏して惟れば（十三オ）」代邸自り来（つ）て天子の位を踐み」漢宮を

謝して汾陽の蹤を追ふ」今上陛下の嚴親なり、」帝道の諮詢に隙無しと雖も」日域朝廷【ぢやう】の本主なり、爭か、」我が國の習俗を賞せざらむ」方今（十三ウ）」茎宰躰を合はせ　華夷、仁を詠ず」風化の万春を樂しぶ春日野の草」、悉くに靡く」月宴の千秋を契る秋津洲の塵」惟れ静かなり」誠に、無為有截の時に膺（つ）て」毫を染め牋を採る志を頤ふべし（十四オ）」故に、斯の一集を撰むで」永く、百王に傳げんと欲ふ」彼の」上古の万葉集は、」蓋し是れ、和詞の、源なり」編次の趣　因准の儀」星序、惟れ邈かなり【にして】　煙鬱、披き難し（十四ウ）」延喜に、古今集有（り）、四人、　綸命を含（つ）」て之を成す」天暦に、後撰集有（り）五人、　絲言を奉り」て之を成す」其の後、拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千」載、等の、集有（り）」聖王數代の勅より出（で）たりと雖も（十五オ）」殊て恨むらくは、撰者一身の最為ることを」茲れに因て」延喜、天暦、二朝の遺美を訪ひ」法河、歩虚、五輩の英豪を定む」神仙の居を排いて」刊り脩むる【せんしうの】席を展ぶ而已斯の集の躰為らくや」先（づ）、万葉集の中より【を】抽きゝ（十五ウ）」更に、七代集の外を拾ふ」深く索めて【さく（し）て】微長、遺（す）こと無（し）」廣く求めて片善、必（ず）擧す【あぐ】」但（し）」網を山野に張ると雖も、微禽、自ら逃る【れ】」筌を江湖に連（ぬ）と雖も、小鮮、偸かに漏る」誠に、視聴の達せざるに當（つ）て（十六オ）」定めて篇章の猶遺れる有らん」今只、採り得るに随（つ）て　且〻勒し終はる所なり」抑（も）」古今には、當代の御製を載（せ）ず（し）て」後撰自りして初（め）て其の時の天章を加（ふ）」各の、一部を考へ【（ふ）るに】　十篇に満たず」而（る）を今（十六ウ）」入（るる）所の自詠　已に、三十首に餘れり」六義、若（し）相兼ねば」一両足るべしと雖も」風骨の絶妙無きに依（つ）て」還（つ）て露詞の多く加はること有（らん）。」偏に道に耽ける思（ひ）を以て」情多き眼を顧みず（十七オ）」凡ての厥の取捨は」嘉尚の餘（り）　特に、冲襟を運ぶ」伏羲皇徳に基して四十万年、異」域に、自ら聖造の書史を観ると雖も」神武、帝功を開（い）て八十二代、當」朝、未だ叡策の撰集を聴かず」定めて知（ん）ぬ天下の都人士女（十七ウ）」斯の道の逢ふに遇へることを謳詞せむ」獨り仙洞無何の郷に、嘲風」哢月の興有ると【りといふことを】記するのみにあらず」亦、皇家元久の歳、故きを温ね」新しき【〳〵あらたなる】を知る心有（り）といふことを呈さむと欲てなり」修撰の趣き」茲に在らずや（十

八オ）」聖暦乙丑」王春三月　尒云ふ（十八ウ）」

作品3　續古今和歌集序

續古今和歌集序

夫（れ）」天地の二儀、共に成（つ）て一物、神に化す」雌雄の両元、相遘ふて八州、號を分つ」日月有（り）、然うして後に、人倫有（り）」人倫有（り）、然（うし）て後に、和歌有（り）」素鵝、斑鳩の往躅自（り）起こ（つ）て、（十九オ）」柿下山邊の秀士に被らしめてより」以降」千五百秋の地、年紀、迴環すと雖（も）」三十一字の篇、風躰、猶、連綿たり」源、浚きときは、流遠し　根、固きときは、木長ず」皇澤洽きときは、此の道作る」此の道作るときは、其の國昌ゆ（十九ウ）」宜なるかな」上、好（む）で之を賞し下擧（つ）て之に従ふ」蘭芬菊耀の才、互に、陶染の」功を競ひ」花心月性の客、各、周遊の」媒と為」是に（二十オ）」政事を聴きたまふ次に　侍臣に命じて曰く」皇帝、君とし臨（み）たまふ第六載、遍く艾」寧を樂しぶ」民黎、子のごとくに来（たつ）て万方自（り）す、皆、華」祝を獻ず」衆正の聖智、決し易く」万機の諮詢、隙多（し）（二十ウ）」屢、餘閑に乗（つ）て　将に一集を撰ばんとす」万葉集は、平城の皇朝、英」俊に課せて芝詔を降さる」古今集は、醍醐の聖代、四」人に勅して百王に傳（へん）と欲」自尒以来」芳塵を継いで總編して、十代に及（ぶ）（二十一オ）」佳句を挺でて類聚、万首に餘れり」之を往時に察するに　何ぞ、遺漏有（ら）ん」然而（も）」霍山の玉、拾へども、盡（き）ず」麗水の金、採れども、餘り有（り）」物皆、此（の）如（し）歌（も）亦、相同じ」肆にいま、延喜、元久の勝跡を賞して（二十一ウ）」殊に、枝幹、相應の佳期を卜む」乙といふは、木なり、其の性、空虚の如（し）、其の形、」花葉有（り）、壮観、之に過ぎたるは無（し）、即（ち）、歌の躰為り」丑と（いふ）は、土なり、終始の際に居て紐結」の名を得たり、萬品、之自（り）顕はる又、歌の徳為り」乙と云（ひ）、丑と云い　體を同（じう）し、徳を同（じう）す」故に、古今集の序に曰（く）、和歌は（二十二オ）」其の根を心地に託（け）」其の華を詞林に發す（といふ）」上の句は、土なり　下の句は、木なり」木、土に非ざれば、生ひざる故なり」此の一句の趣　二字の理を叙べたり」此（の）歳に相當（つ）て　我（が）道を恢弘す」両代、両集　以有（り）、由有（る）かな（二十二ウ）」仍（つ）て前の内大臣正二位藤原朝臣」民部卿藤原朝臣為家」侍従藤原朝臣行家　右大弁藤原朝臣光俊等に詔（し）て」人々、家々の集

尊卑、緇素の作」皆、精要を究めて　各、呈進（せ）しむ」最初の万葉集は、濫觴為るに依（つ）て猶、之を採る」其の後の十代集は、綴玉多（し）と雖（も）悉（く）に、之を除く（二十三オ）」伏（し）て惟（れ）ば」位を九禁に遁れたまへども　二帝に父為り」桃花源の春、菊花源の秋、春」秋を姑峯の花の色に留む」青松洞の風、赤松洞の月、風」月を仙洞の松の陰に移す」斯の方外の居に就いて握翫す【とりもてあそぶ】（二十三ウ）」彼の端右の才を引（い）て琢磨す」華（を）摘べ、實を摘（べ）、深（く）、風骨の妙を索め」式て諷し、式て吟（じ）、廣（く）、露膽の詞を捜る」取捨して二千首を得」部類して二十巻と為」名（づけ）て續古今和歌集と曰（ふ）」方に今（二十四オ）」手づから、提携を勵まし　目、暫くも捨てず」後鳥羽上皇の叡襟に随（ふ）と雖（も）」恥づらくは彼の鳳毛中興の秀章を隔てたることを」而（る）を」今上の陛下　天才日（に）新（た）なり」同胞仙院、言葉を芝砌に顕（は）し」中書大王、詞花を李【り】蹊に播す（二十四ウ）」道に耽る志に堪えず　愁に閣き難（き）句を聚む」還（つ）て恐（るらく）は」後の今を覩れるをして　今の古を覩（る）に勝れらむことを」於戯」天、万物を生す、万物の形容、區（に）分れたり」年に、四時有（り）、四時の景趣、互に好し」其（の）外の雑類、寔に繁し（二十八オ）」意端の感思、一に非（ず）」釋門の作神道の詠」綽、幽玄に在（つ）て　尤も、情素を貴ぶ」此の中に」昌泰の右相は　絶妙の上才なり」累代の集に、菅氏鼎臣の号を加（ふ）と雖（も）」徳を尊ぶる餘（り）、今、藂祠篇什の字を載せたり（二十八ウ）」修撰の義　蓋（し）、云に備（は）れり」凡て、和哥は、志の之（く）所なり」氣の物を動（か）し　物の人を感ぜしむる」情、中に蕩け　言、外に形はる」以て三才を暉麗し　以て万有を和理す」國を瑩き人を瑩く要、雙無（し）」古を照し今を照す美、第一なり（二十六オ）」譬へば」説命、孔だ昭かなり、能（く）殷の武丁の金を礪ぐ」徴諫、暗からず、誠（に）唐の天子の鏡為（るが）猶（し）」啻だ、三易の衆藝に超えたるに比するのみに匪ず」亦将、君臣の合應を致（す）に同（じ）」蓋（し）三代古今の撰を以て」諸集編次が最と為べ／し【べき】（二十六ウ）」文永二年　玄陰季月」大綱の趣　筆（を）右（つ）て勒す（と）」云（ふこと）尓（り）（二十七オ）」

作品4　柿下朝臣人麿畫讃一首幷序

柿下朝臣人麿畫讃一首〈序を幷す〉

大夫【まちぎみ】姓は柿下　名は人麿」蓋（し）、上世の歌人なり（二十七オ）」持統文武の聖朝に仕へて」新田高市の皇子に遇へり」吉野山の春の風、仙駕に従（つ）て壽を獻じ」明石の浦の秋の霧、篇舟を思ふて詞を瀝つ」誠に是（れ）」六義の秀逸　万代の美談なる者か」方に今（二十七ウ）」幽玄の古篇を重くせんが為に」聊（か）、後素の新様を傳ふ」因（つ）て感（ずる）所有（り）乃（し）讃を作る」其の辞に曰（く）」和歌の仙　性を天に稟けたり」其の才、卓尒として　其の鋒　森然たり」三十一字　詞華露鮮かに（二十五オ）」四百餘載　来葉風傳ふ」斯の道の宗匠」我（が）朝の先賢」涅にすれども滓むこと無し」之を鑽れども弥（よ）堅し」鳳毛彙少（し）」麟角猶専らなり（二十五ウ）」既に獨（とつ）歩と謂（ふ）　誰か敢て肩を比べむ【ひせん】（二十九オ）」

作品5　一條院御時中宮御産百日和哥序

一條院御時中宮御産百日和哥序

儀同三司

第二の皇子百日嘉辰禁省に合宴す」外祖左丞相以下卿士大夫座に侍る（二十九オ）」者済々たり」龍顔を咫尺に望（み）」鸞觴を酌（むで）獻酬す」恩に酔ふ餘　私に相語（つ）て云く」隆周の昭王穆王暦數長し我（が）君も」又暦數長（し）」本朝の延暦延喜胤子多（し）我（が）君も（二十九ウ）」又胤子多（し）」康いかな帝道　誰か歓娯せざらむ」請ふ風俗に課せて　将に壽詞（を）獻（ぜむ）とをもふ（と）」云（ふこと）尒（り）（三十オ）」

作品6　春日野遊詩序

春日野遊詩序

橘在列

夫（れ）」上年の候　仲春の天に」槐林の深窓を出（で）」松樹の遠地を望（む）」所謂（る）、好客の群遊なり　時（に）（三十ウ）」嵩岳の西（の）脚」洛水の東の頭に」野煙の春の光に嘯ひて各一句を吟じ」　山霞の晩の色を酌むで皆数盃に酔（ひ）たり」松根に依（つ）て腰を摩（せ）ば千年の翠」手に満（て）り」　梅花を折（つ）て首に挿（せば）二月の雪（三十一オ）」衣に落（つ）」斯れ蓋し」吾が朝の風俗」子日の嘉会　なり」志の之く所　盍ぞ翰墨に命ぜざらん（と）」云（ふこと）尒（り）

（三十一ウ）」

作品7（初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序）

盃酌（しやく）に及（ぶ）竿無（かず）（く）風俗を詠（ん）で歌（を）詠（む）」誰（か）偏に洛外の逍遥（せうえう）と謂（はん）」乃是（すなは）（ち）海内の清静を樂（しぶなりと）」云（ふこと）尓（り）（三十二オ）」